



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「人民の意志」党の革命理論：資料と解説
Author(s)	鳥山, 成人; Toriyama, Shigeto
Citation	スラヴ研究, 1, 25-70
Issue Date	1957
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/4925">https://hdl.handle.net/2115/4925</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112866.pdf



# 「人民の意志」党の革命理論

— 資料と解説 —

鳥 山 成 人

## 目 次

序

資 料

〔Ⅰ〕 党の基本的主張

- 1 「社会主義者と政府」
- 2 「党の任務」
- 3 「革命における人民大衆の望ましい役割」
- 4 「政治革命と経済問題」

〔Ⅱ〕 党の綱領

- 5 「執行委員会綱領」
- 6 「党の準備工作」
- 7 「〈人民の意志〉党労働者党员綱領」
- 8 「軍＝革命組織綱領」

〔Ⅲ〕 その他

- 9 「旧同志への公開状」
- 10 「一社会主義者の政治的書翰」
- 11 「執行委員会のアレクサンドル三世宛の書翰」

解 説

## 序

ナロードニキの革命運動には二つの山がある。その一つは、宣伝と煽動によって人民蜂起の形で革命を実現しようとした1873年から翌年にかけての「人民の中へ В Народ」の運動の時期である。もう一つは、1878年1月23日<sup>1)</sup>のヴェラ・ザスリチ Вера Засулич の警視総監トレポフ Трепов 暗殺事件に始まる数年間の政治的テロ全盛の時期である。後者は前者の失敗による人民＝農民蜂起の革命方式に対する幻滅とその後の政府の苛酷な弾圧が招来したものであるが、この政治的テロの時期に、第二次「土地と自由 Земля и Воля」党が1879年夏の党大会の後分裂する。これはこのテロ政策の可否をめぐる党内の意見の対立がその極限に達したためであるが、この結果は、従来党の機関誌「土地と自由」に拠って社会経済革命、特に農民による土地革命の優先的な必要を主張していたプレハノフ Плеханов などの党主流が今や少数派となり、これに対して、政治的テロをも有力な手段とする政治革命の経済革命に対して優先すべきことを主張していたエヌ・アー・モロゾフ Н. А. Морозов などの分派が多数派となって、新に「人民の意志 Народная

1) 本稿での日付は特にことわらない限り、すべて旧ロシア暦による。

Воля」党が結成されることになる。そして、プレハノフが中心になって新に組織された「黒土再分割 Чёрный Передел」党に対して、この「人民の意志」党の、政治革命を経済革命に優先させ、政治的テロを是認する革命運動と革命理論が、その後少なくとも 1881 年 3 月 1 日の「人民の意志」党によるアレクサンドル二世暗殺の時まで、ロシアの革命運動と革命思想の主流を形成する。従って「人民の意志」党の革命理論を知ることは、ナロードニキの革命運動、特にテロリズムの段階におけるそれを明かにする上に不可欠の重要性をもっている。

本稿は、このような観点から、「人民の意志」党の革命理論を具体的に知るための素材として、この党の機関誌「人民の意志」にのつた諸論文や党の綱領その他のうちから特に重要と思われる若干のものを選択して紹介しようとするものであるが<sup>1) 2)</sup>、資料の紹介に入るに先立って予め、これらの資料を採録したベー・バジレフスキー Б. Базилевский 編の資料集「人民の意志党文献 Литература партии Народной Воли<sup>3)</sup>」の内容について簡単な説明を行っておきたい。

「人民の意志党文献」は全体が四部に分れており、第一部が「定期刊行物」で雑誌「人民の意志」を始め党の機関誌類、第二部が「文書」で党の綱領の類、第三部が「宣言」で執行委員会を始め党の各級機関の出した宣言の類、第四部が「資料」でマルクスなどに宛てた執行委員会の書翰と有力な党員の遺言書を収めている。巻末の目次を含めて全体で 978 ページの大冊であるが、「人民の意志」党関係の基礎資料が全部これに網羅されているわけではない。編集者自身ことわっているように<sup>4)</sup>、この資料集の編集の時までに編集者の手に入って収録されたものの他、どの部門についても、若干の入手不能な資料が存在しており<sup>5)</sup>、その入手方について編集者は読者の協力を要請している。又編集者がなんらかの理由で——その理由が必ずしも明かでない場合もあるが——この資料集から意識的に省いている資料もある。

量的にこの資料集の大半を占めている第一部即ち定期刊行物の部では、一番重要な党の機関誌「人民の意志」は 1879 年 10 月 1 日付の第 1 号以下全 12 号 (10 冊<sup>6) 7)</sup> が収録

- 1) 「人民の意思」党はアレクサンドル二世暗殺直後に大弾圧を受けてその活動が振わなくなり、これと共にその革命理論にも次第に政治的テロ＝政治革命優先の方式から再度人民蜂起による革命の方式へと変化がみられるようになるが、ここではテロリズムの段階におけるこの党の革命理論を知ることが主な目的なので、時期的にはこの暗殺事件までの資料に重点がおかれる。
- 2) 「人民の意志」党関係の資料の他に、特に「黒土再分割」党の「人民の意志」党批判論文を一つ加えた (資料 IX) が、これは参考のためのものである。
- 3) これは「ロシア歴史叢書 Русская историческая библиотека」の第六集として 1905 年にパリで出版されており、ベー・バジレフスキー編の集録「ロシアの国事犯 Государственные преступления в России」の第二の附録という副題がついている。(以下この資料集を Литература п. Н. В. 又は単に Литература あるいは Лит. と略する)
- 4) Литература, п. Н. В. の序文参照。
- 5) これは、その大部分がロシア国内の「人民の意志」党の地下印刷所で印刷されて流布された非合法文献であったことによることはいうまでもない。
- 6) 1 号 (発行日付 1879 年 10 月 1 日; 印刷日付 10 月 4 日), 2 号 (10 月\* 1 日; 11 月 20 日), 3 号 (1880 年 1 月 1 日; 1 月 14 日), 4 号 (12 月 5 日; 12 月 24 日), 5 号 (1881 年 2 月 5 日; 2 月 24 日), 6 号 (10 月 23 日; 10 月 23 日), 7 号 (12 月 23 日; 12 月 23 日), 8-9 号 (1882 年 2 月 5 日; 3 月 9 日), 10 号 (1884 年 9 月; 9 月 30 日), 11-12 号 (1885 年 10 月; 12 月 2 日)
- 7) 「人民の意志」の編集者は、アレクサンドル二世暗殺事件まで即ち 5 号までがエヌ・アー・モロゾフ Н. А. Морозов とエリ・アー・ティホミロフ Л. А. Тихомиров で、それ以後はゲー・アー・ロパティン Г. А. Лопатин などであったと推定されている。

\* 「11 月」の誤りかと思われる。なお Литература п. Н. В. には、この種の数字の誤りや活字の誤植がかなりあるが、これが最初からあったものか、Литература に取められる際に生じたものかはわからない。

されているが、党の地下印刷所が官憲に襲われてこの「人民の意志」の発行が中絶した<sup>1)</sup>時にその代りに出された「人民の意志小新聞 Листок Народной Воли<sup>2)</sup>」と、特に労働者党員を対象に出された雑誌「労働者新聞 Рабочая Газета<sup>3)</sup>」には欠号があり、又スイスで発行されていた「人民の意志」党系の「故国にて На Родине」と「人民の意志通報 Вестник Народной Воли<sup>4)</sup>」は、入手が比較的容易であったためか、全く除かれていて、僅かに後者の発行声明が収められている<sup>5)</sup>だけである<sup>6)</sup>。次に第二部では、「労働者戦闘部隊規定 Устав боевой дружины рабочих」などの若干の重要資料が入手不能であったため載せられていない<sup>7)</sup>。第三部でもアレクサンドル二世暗殺事件に関する声明などが欠けている。更に第四部では、ここに収められているのは当時未発表の重要なものだけで、その他の書翰や回想起で既になんらかの形で発表されていたものは重要なものでも除かれている<sup>8)</sup>。従って「人民の意志党文献」は決して完全な資料集ではない。しかし機関雑誌「人民の意志」全 10 冊を始め主要な綱領・宣言など主な資料は大半がこれに収録されているので、差当りこれだけから紹介すべき材料を選択するとしても、それによって「人民の意志」党の革命理論について重大な誤解を生むような印象を与えることは避けられると思われる<sup>9)</sup>。

- 1) 「人民の意志」党の地下印刷所はこの党の存続期間中転々として十回以上移転しているが、この移転は大部分、印刷所が政府官憲に発見され、破壊されたことによるものであった。
- 2) 「人民の意志小新聞」に関する記述は文献によって多少づつ違い、部分的に相互に矛盾し、又時に明かに事実と相違している。(Большая советская энциклопедия 第2版の〈Народная Воля〉の項目; Kluge, E. E., Die russische revolutionäre Presse in der zweiten Hälfte des neunzehnten Jahrhunderts, 1948, S. 111; Mavor, J., An Economic History of Russia, V. II, 1914, p. 111, n. 5; Bienstock, J.-W., Histoire du mouvement révolutionnaire en Russie, t. I, 1920, p. 229 などを比較参照) このためこの雑誌の正確な発行回数や発行年月日はわからないが、Литература に収められているのは、Революционная хроника という副題のものが、第1巻第1号(発行日付1880年6月1日; 印刷日付なし)、2号(8月20日)、3号(9月20日)、第2巻第1号(1881年7月22日; 8月2日)の4冊、Социально-революционное обозрение という副題のものが第1号(発行日付なし; 印刷日付1883年7月20日)及びその附録(末尾欠)と2号(1883年10月26日)の2冊である。
- 3) 「労働者新聞」は1880年末、月刊を立前として発刊されたが、約一年間全部で6冊しか出なかった。Литература に収められているのは、第1巻第1号(1880年12月15日発行)及びその附録と第2号(1881年2月5日)の2冊だけである。
- 4) 前者は1882年と翌年の間に3冊、後者は1883—1886(87?)年の間に5冊出た。
- 5) Лит., стр. 862—66
- 6) 以上の他、Литература, п. Н. В. の各所の編集者の註や Bienstock, op. cit., p. 229 によると、「人民の意志」党は「〈人民の意志〉 曆 Календарь «Народной Воли»」を出していたことがわかるが、これは Литература に収められておらず、その発行期間、回数、形式、内容は一切わからない。
- 7) Литература, стр. 867 の註を参照。
- 8) これらの他、この資料集の刊行後、特に第一革命後の比較的言論・出版の自由であった一時期と、十月革命後三十年代初頭までの間にさかんに出された、「人民の意志」党のそれを含むナロードニキ運動関係の記録や回想起の類は、当然のことながら Литература п. Н. В. の編集の対象になっていない。
- 9) なお Литература п. Н. В. で欠けている資料にアレクサンドル二世暗殺事件以後のものが比較的多く、それ以前については相対的に少ないことも、この暗殺事件までのテロリズムの段階に重点をおいているわれわれにとっては、資料的制約に関する危惧を少くしてくれる点である。

# 資 料

## I 党の基本的主張

「人民の意志」党の基本的な主張は、党の機関誌「人民の意志」の第1号と第2号のそれぞれの巻頭論文「社会主義者と政府 Социалисты и правительство」と「党の任務 Задачи партии」、第4号の「革命における人民大衆の望ましい役割 Желательная роль народных масс в революции」、第5号の「政治革命と経済問題 Политическая революция и экономический вопрос」などから、その大要をうかがうことができる。以下発表順にこの四つの論文を紹介するが、最後のものは全文、他の三つもそれぞれほとんど全文である。

### 資料 I

#### 社会主義者と政府<sup>1)2)</sup>

ペテルブルク、1879年9月20日

Delenda est Carthago<sup>3)</sup>!

われわれは極めて困難な、しかし同時にそのあり得べき結果に照して極めて興味深い、歴史的時点を生きなければならない。……<sup>4)</sup>

政府を先頭に現在制度全体が住民の如何なる部分の利益とも全く一致していないことを声明しているこのような歴史的時点は、政府にとっては宿命の時点であるが、すべての反対党にとってはその政治的成熟、その実践性、祖国に奉仕するその能力の検査である。何故なら、政府が孤立しておればおるほど、その活動と人民の利益とのつながりが明かでないといけないほど、社会思想はそれだけより強く刺戟され、革命の必要性の思想はそれだけよりひろがるようになるから。およそ大衆は不精で臆病である。彼等は何よりも静穩を重んずるのであって、彼等が未知の危険な未来よりも、最も悪いがしかし既に慣れた現在をよしとすることやめるのには、政府の側からの多くの努力が必要である。……

……到るところ、国中に、批判が、よりよいこととこのよりよいことの実現方法の探索が、野の芽のように、おさえ難く芽を出し始めている。この批判は小心であり、複雑な社会問題を解決する社会思想の能力は限られているかもしれない。その代りに、目覚めつつある大衆は、どこに出口があり、どのようにしてそこに行くべきかを吾人は知っている、と大声で宣言している党に、それだけ大きな期待をかけている。しかして、もし党がその理想において、その手段において、時代の真の要求をとらえる能力をもつならば、それは一つの力になるであろう。すべての社会的な不決断が党に解説を求めるようになり、人民がそのすべての課題を党の指導の下に解決するようになるからである。

……

政治的幻想は人民を破滅させる。が、それは党をも破滅させる。例えば、何故農民には、

1) Лит., стр. 3—11

2) この筆者は Н. А. Морозов と推定されている。

3) 「カルタゴは亡ぼさざるべからず！」(大カトー)

4) <……> は、特にことわらない限り紹介者のもので、引用の省略を示す。

「おやじさん＝ツァーリ батюшка-царь」に請願をとどけることさえすれば、すべてが参酌されまとめられるであろう、と思われるのか。何故コシェレフ<sup>1)</sup>氏は、ゼムストヴォから諮問議会に代議員を召集しさえすれば、すべてはすらすらと進むであろう、と考えるのか。その理由は、両方とも幻想の中に生きているからである。……政治的幻想への傾きがわがロシアのすべての社会的傾向の特色であることは、残念ながら認めざるを得ない。例えば、74年の宣伝家<sup>2)</sup>は請願のため村から派遣された農民に果して似ていないであろうか。彼が百姓のところに行きつけさえしたら、百姓のところに行きつくのをさまたげられさえしなかったら、その後は万事がすばらしいであろう、お百姓に話しさえすればいい、彼はもうすべてを判断し、行うであろう。結果の現れ方は完全に一様である。即ち、「ツァーリ＝おやじ」が百姓そのものを欺いたのと全く同様に残酷に、百姓は宣伝家の楽天的な期待を欺く。……

何らかの将来性を自任する党は、何よりも、生活に対する厳格に現実的な関係に基礎を置かなければならない。最も楽天的な理想は無益であるばかりでなく、有害である、それがその実現困難の故に生活そのものの中で現実化され得ず、他方規模は劣るが可能性のある生活における改善から力と努力をそらすならば。観念的には有益な行動様式の宣伝も実践においては極度に有害であり得る、もしそれが現在では全く考えられないもので、他方、正にその観念性の故に、人民的な途からの最初の障害の除去がその適用なしには不可能な行動様式を拒否するならば。行動の党は具体的で実現可能で、人民に直接役立つ目的を自らに設定して、処与の時間に最も現実的な手段を選択しなければならない。

最も重要な、純粋に実践的な現在の問題の一つは国家関係の問題のようにわれわれには思われる。無政府主義的傾向はわれわれの注意をこの重要な問題から永い間そらして来、又現在に至るまでそうしている。しかるに正にわれわれのロシアでは特にこの問題を無視してはならないであろう。われわれの国家はヨーロッパの国家と全く違っている。われわれの政府はヨーロッパにおける如き支配諸階級の全権委員たちの委員会ではなくて、独立の、自己自身のため存在している組織、かりにわが国に何らの搾取階級も存在しないという場合にさえ人民を経済的及び政治的奴隷状態においておくであろうところの、位階制的な、規律化された協会である。われわれの国家はロシアの国土の半ばを私有財産として所有しており、農民の過半数は国家の土地の小作人である。われわれの国家の精神に従えば、全住民は主として国家のために存在している。国家の諸義務が住民の全労働を吸収し、そして——特徴的なことであるが——わが国の株式仲買人や鉄道経営者のポケットにさえ、農民の小金は国庫を経由して流れこんでいる。一切の搾取を創って支持し、全国土をその鉄の爪で締めつけ、一切の生命、思想及び創意を圧迫して、われわれの国家はおとぎ話の怪物、人間を犠牲にささげることによってなだめられ、そしてそれと闘うのには天の力の特別な介入を必要としたおとぎ話の怪物のようなものである。ロシアの発達に寄与してその時代に国事犯と見なされなかった人を、ロシア思想史はほとんど一人もあげることができない。……

この事実——ロシア国家とロシア政府とそのすべての特殊な性格、その意義と活動のすべての結果を——革命党は、歴史の要求と同じ水準に立つことを欲するならば、注意しな

1) スラヴ派左派のアー・イー・コシェレフ А. И. Кошелев (1806—83) のことと思われる。

2) いうまでもなく、「人民の中へ」の運動の参加者のこと。

いわけにはいかない。党の直接の活動地点は人民であり、政治的改革の方法によっては党は人民の要求を実現しないであろう、と指摘することはできる。それはそうだが、ロシア軍の作戦の直接の目標もコンスタンチノーブルではなかったか<sup>1)</sup>。それがしかし、プレヅナをとってからでなくてはバルカンに進軍することができず、ロシア軍のすべての連絡を絶つことのできる軍隊を背後に残しておけなかったので、ほとんど半年近くもプレヅナの前面に止らざるを得なかったのである。政府はわれわれに宣戦しており、われわれが欲すると否とにかかわりなく、われわれを打つであろう。われわれは、勿論、防禦しないこともできるが、これからは恐らく何人も未だ決して勝利を得ることがなかった。われわれの直接の目当ては攻勢に出て、われわれの活動を許さず、われわれの陣営から最もよい活動家を日々奪い取っており、われわれの力の 99 パーセントがそれとの無益な闘争に使われているスパイ、密告、つまらない難くせの網でわれわれをしばりあげている、このしつこい障害をわれわれの途からはねのけることである。われわれは、人民の間で宣伝、煽動が、更には純粹に蜂起的な活動すらが、絶対に不可能であるなどとはいわない。しかし現在の諸条件の下ではそれはあまりに困難である。「人民の意志」のこの号にのせられている論文「村から *Иъ деревни*<sup>2)</sup>」を読者はみてほしい。かかる状況の下で活動は多くの結果をもたらすであろうか。われわれがいうのは、党にとってはこの状況を変えることが絶対必要であり、政府の恣意をおさえ、人民の生活に対するこの鉄面皮な干渉をなくし、人民の間での活動がダナオスの娘たちの底なしの樽を満すことではないような国家体制を創ることが必要である、ということである。

政府の意義をすべて知り、政府と闘ってその恣意をおさえる必要を知った以上、われわれの党は政府の力におびえてはならない。ロシア政府は粘土の足をもった鉄の巨像である。それは国の何人の利益にも依拠しておらず、自分自身のために生活しており、それ故に、粗野な力、紀律及び自己自身の陣列内の受身の服従を除いては、更に恐らく、その反対者たちの政治的未完成以外には、どこにも支持をもっていない。政府がわれわれに恐ろしくあり得るのは、ただわれわれが全力をあげてそれに向って進むまでの間である、この場合には、ロシアで考え得る限りのすべてのものがわれわれの背後にあるであろうから。

いずれにせよ、現在の統治組織はその最後の日に来ている。それを倒すものが誰もいなくても、それは自ら自然死をとげるであろう。しかしわれわれの党にとっては、古い秩序の廃墟の上に興るべき新しい秩序が人民と党そのものの利益に則応していることが、本質的に大切である。新しい将来の国家体制が人民の影響の外にとどまること、それが住民の他の諸階級を解放して他の諸政党に活動の可能性をひらきながら、人民と社会主義政党を古い条件の下に残すことを許すことは、ゆるしがたい誤りであろう。こうした結果になるか、それとも他の結果になるかは、現在、われわれ自身の手の中にある。われわれは自ら政府に対する攻撃と政治的変革のイニシアティブをとるか、それとも、人民のまわりで無益に足掻くのすべての力を費して、従来通り政治活動を無視するか。問題はここに存する。第一の場合にはわれわれは、疑いもなく、運動の中に自己の影響の分前を有して、人民の完全な解放を実現しないまでも、少なくとも人民主権の承認を獲得し、人民に現在の事物の秩序全体に対する影響力を与え、人民にとって望ましい傾向の存在を認可し、人民へ

1) ここでは 1877—78 年の露土戦争のことが念頭におかれている。

2) Лит., стр. 15—27

の奉仕が国事犯と同義ではないようにするであろう。第二の場合にはわれわれは、疑いもなく、現在より更に困難な状態におちいるであろう。というのも、新しい国家は、勿論、現在の国家より強力で、物質的な力ばかりでなく——最も重要なことであるが——精神的な力をもより多く有し、それと戦うことは本当に困難であろうから。自己の影響なしに政治的変革が行われることを許してしまえば、われわれの党は、恐らく、教世紀の困難な準備工作を自らに運命づけることになるであろう。

くりかえしているが、現在の時点は最高の重要性をもった時点である。迫害、死刑及び獄舎での除々の圧殺といったすべての困難——これらすべても、社会主義党が情勢を理解してそれを支配する能力を有する時に人民のために現在の時点が与え得る巨大な結果に比しては、ものの教ではない。

しかして党には、疑もなく、これをなす能力がある。政治的変革の意義に関する思想は除々にではあるが堅固にわれわれの陣列の中で成熟した。この思想をヴァレリアン・オシンスキー<sup>1)</sup>は、その死の前の手紙で、最後の遺言として残した（「土地と自由小新聞<sup>2)</sup>」6号をみよ）。この思想は反政府運動の豊富な一連の事実の中に現れた。そして既に「土地と自由」で述べたことを、われわれ自身くりかえす用意がある。即ち「政府は——とわれわれはいった——既に革命家だけにではなく、全ロシアに宣戦を布告している。さもあらばあれ。……<sup>3)</sup>われわれはわれわれの陣列から個々の人物が多数たおれるであろうことを知っている。しかし、歴史の全行程が革命にむかって進んでいる時、われわれの現在の国家が何であるかをロシアに残りくまなく説明する労を政府自身が引受けている時、個人々の死は党にとっては恐ろしくはない。われわれは挑戦に応ずる。……<sup>4)</sup>」（「土地と自由」5号<sup>5)</sup>、4月2日<sup>6)</sup>の反響）ロシアの生活のすべての条件が、偏見にとらはれたすべての理論にもかかわらず、制し難くわれわれを政治闘争に導いているが、この政治闘争は、もしわれわれの間に、政治闘争に参加することによってわれわれは他人のために相撲をとってやるのであり、勝利の結果を利用するのは人民ではなく、又社会主義者ではない、といった陳腐な偏見がないならば、更に一層一般に受入れられるであろう。われわれはこうした偏見と全く逆に考えている。正に政治的活動から遠去かったことによって、われわれは他人のために相撲をとってやるのであり、正に政治的活動から遠去かったことによって、われわれは人民に有害な諸分子のために勝利を準備するのである。こうした行動方式の下でわれわれは、人民のために守るべきはずの権力を有害な分子に無雑作に与えるからである。

- 1) Валериян Осипский (1853—79)。「土地と自由」党左派のテロリスト。1879年5月に捕えられて死刑に処せられた。「人民の意志」第2号に「ヴァレリアン・オシンスキーに関する伝記的覚書 Биографические заметки о В. О.」がのっている。(Лит. стр. 101—116)
- 2) 「〈土地と自由〉小新聞 Листок „Земли и Воли“」は第二次「土地と自由」党がその機関誌「土地と自由」と並行して1879年3月12日に第1号を発刊した小型紙で、主に党の戦術問題を取扱った。以後同年夏までに6(?)冊出されたが、政治的テロ派のモロゾフが編集して、党左派の機関誌の観を呈した。
- 3, 4) この〈……〉は引用者即ちこの論文の筆者のもの。
- 5) 「土地と自由」は1878年11月10日に第1号、以後1879年4月までに5冊出された。第5号の編集の実権はプレハノフにあり、同じく編集者であったモロゾフの意向は部分的にしか反映されなかった。
- 6) ソロヴィヨフ Соловьёв のアレクサンドル二世暗殺未遂事件の日。この事件の直後に出了「土地と自由」第5号で、この事件の「反響」はわずかにこの欄にしか見出されなかった。

しかし偏見は事実の圧力の下にくずれるであろう。そして活動的な行動の党は永い間机上の理論に支配されていることはできない。社会主義党が政府組織に対して偶発的にではなく組織的に、不屈に、恒久的に立上り、生気をうばいすべてを圧迫して国家機関を破壊して、人民にその最も重要な諸要求の実現と、その思想、その理想、その共同生活形態の今後の自由な発達の可態性とを保証する時が既に来ている、とわれわれは信ずる。

Delenda est Carthago!

## 資料 II

### 党の任務<sup>1)2)</sup>

1879年11月10日

現存の国家形態をくつがえし、国家権力を人民に従属させること——われわれはこのように現在における社会革命党の最も重大な任務、現在のロシアの諸条件がわれわれを故意にではなくそこに導いている任務、を規定する。われわれはこの一般的な問題を、活動の部分的諸形態、それらの現れ方に移る前に、なお検討しなければならない。

歴史はわがロシアに二つの主要な自立的勢力、即ち人民と国家組織を創った。この他の社会グループは現在に至るまでもわが国では極めて従属的な意義をもっている。例えば、わが貴族層は、政府に耳をつかまれて世の中に引っぱり出されたが、しかし、すべての配慮にもかかわらず、鞏固な社会グループに結集する能力を完全に欠いていることを示し、かろうじて百年間存続した後、今や全く立去り、散り、一部は国家組織、一部はブルジョアジーと融合し、一部はどこへとも知れずかくれてしまった。わが国の生活のすべての条件によっておし出され、その発生そのもの際同じく政府の庇護の下に現れたブルジョアジーは、疑いもなく、永続的存在へのより多くの機会を有しており、もしロシアの生活の一般的諸条件が変らなければ、それは、勿論、間もなく恐るべき社会的勢力を構成して、人民大衆ばかりでなく、国家そのものをも自己に従属せしめるであろう。しかしこれはなお将来の問題である。現在はわがブルジョアジーは、やはり、何によっても結合されていない掠奪者の群以上のものをつくってはいない。それはなお身分的自覚も、世界観も、身分的統一も作り出してはいない。西欧のブルジョアは彼の身分が依拠している様々な基礎の神聖さを本当に確信していて、この基礎のために生命を賭している。わが国では同じ基礎に対するシニカルな侮蔑に、他ならぬブルジョアのところにおけるより以上にはどこにおいても出会うことができない。わがブルジョアは身分の一員ではなくて、単に、良心と真理に従わずに行動することを心の中で意識している、個々の、利巧な、手段を選ばぬ掠奪者である。疑いもなくこれは、わがブルジョアがこの世に生れたばかりである、ということのみに由来する一時的な現象である。間もなく、本当に間もなく、それはある形をとるであろう。あと数世代たてば、われわれはわが国に本当のブルジョアを見、理論的基礎をもち、鞏固な世界観をもち、身分的倫理をもつ、原則に高められた掠奪を見るであろう。こうしたことすべては勿論起るであろう、がそれは、われわれの国家及び社会諸関係の総体的変革がブルジョアジーの根底を伐りとらない場合だけである。総体的変革は極めて可

1) Лит. стр. 75—83

2) この論文の筆者は J. A. ティホミロフと推定されている。

能性がある、とわれわれは考える。そしてもしそれが本当に起ったら、わがブルジョアジーは、貴族層が舞台から去ったのと全く同様に、去るであろう。ブルジョアジーは、本質的には、同じ国家によって創られているから。

それは一部は国家によって意識的且計画的に創られており、一部は、人民が国家によって追いこまれている、且掠奪的クラーク身分を大衆の中から引出さざるを得ない、諸条件の不避的結果として現れている。

現体制全体の観点からは、わが農民は現在無であり、無よりも悪い。これは役畜のようなもの、牧人がその肉を喰い、その毛と皮を着るためにのみ存在している羊のようなものである。これがわれわれの国家の原則である。人民は、人格という意味では、人間という意味では、零である。その経済的利益は、それが国家に必要な限りにおいてのみ認められる。農民が喰い、飲み、着、小屋をもたなければならぬのは、専ら、餓死しないためであり、働き、国庫に金を納め、戦争に役立つ兵士を提供し、などする可能性をもつためである。

……

農民は、国家に力があるだけ、それだけいやしめられ、しいたげられている。彼は経済関係において赤貧の状態に追いこまれており、彼は一片のパンのために、最も動物的な、しかし頑固な欲求のために、最も激烈な生存闘争を行うことを強いられている。彼のすべての考えは、租税を納付するためのループルを獲得し、すべての義務を遂行し、自分と家族を養い、新たな仕事のために休憩することにむけられざるを得ない。しかもこれが来る日も来る日も、昨日、今日、明日と一生涯なのだ。自分のために、人間のために生きる時はなく、考える時も、考えることもない。個人の状態はこのようである。ミールの状態も同様である。ミール、共同体は何のために存在しているのか。ミールは何をしているのか。兵士を提供し、租税を集め、未納金を取立て、現物的諸義務を遂行すること——これがミールの生活である。そして農民が不本意なループルの追求に個性をなくさしめられているだけ、それだけ、この専ら財政上と治安上の分野で政府の考えている共同体は、個性をなくさしめられ、歪曲されている。

このような状態は、クラークを生むために、あたかも意図的に考えられているかのようなものである。利口な、精力的な、私生活の欲求をもつ者には、こうした環境にあっては出口がない。ミールと共に亡びるか、自ら掠奪者になるかである。ミールの人間としては彼は、誰でもその意のままになる赤貧の、いやしめられた存在である。掠奪者としては彼は、法には述べられていないが現実には認められている特殊な身分に一挙に躍進する。クラーク＝搾取者たる彼は物質的な点でかなりの生活をする可能性を得るばかりではない。彼は始めて人間になり、市民にさえなる。彼を当局もお坊さんも尊敬し、彼は鼻面をなぐられることも、人間的な人格を嘲られることもなくなる。法律は彼のために存在し始める。そこになんらかの選択があり得るであろうか。われわれはまだ一般的な像しかつかんでいないのであって、これからこまかい点をつかもう。ミールの伝統を裏切らなかつた利口で精力的な農民はどうなるであろうか。それは「騒動を起す者」の、「混乱を起す者」の、「一揆を起す者」の候補者、ありとあらゆる迫害、鞭打ち、逮捕、流刑などの候補者である。が、いやしめられ、しいたげられ、個性をなくさしめられたミールはしばしば、この困難な闘争において精神的支持すら与える能力がなく、又大ていの場合クラークはミールをその無力

の故に、個々の成員についても、共同体全体についても、全く心からそして深く蔑視している。

クラークが生れている。出口のない状態が百姓を債務奴隷に追いやっている。一体これは誰の罪なのか。国家の圧迫でないとすれば、大衆を無一物の状態に追こもうとして大衆から搾取と闘う一切の可能性を奪っているその経済的圧迫、大衆を市民的及び政治的無力にもたらし、人民を頹廢させて人民のエネルギーを塞いでいるその精神的圧迫でないとすれば、一体誰の罪なのか。この圧迫を取除くなら、あなた方はブルジョアジー形成の機会の十分の九を奪うであろう。

話をもとにもどそう。現在の国家は、その存在の事実そのものによってブルジョアジーの出現をよび起しつつ、個々の場合にも全く意識的にブルジョアジーを人々の間に引張りこんでいる。わが国の工業史を想起してみよう。多くの県の家内生産が、ありとあらゆる大工業保護のおかげでつぶされた。今に至るまでも保護関税だけによって生きているような工業部門さえ創られた(例えば、人民的な家内工業的麻布を殺した木綿工業)。鉱山業者のためにいくつもの公国が創られ、そして百年の間ウラルの住民は、主人なしに残された時(プガチョフの時)労働者自身が行ったようにさえ事業を運ぶことのできなかつた資本家たちの奴隷にされた。鉄道業はわが国では同様に世界で独特の像を提示している。すべての路線が百姓の金で、なんのためか知らないが数億をいろんな企業家に分贈した国家の金で、建てられた。全く同様に、百姓の金は株式投機の支持のために政府の空のぼけっから流れ出した。ブルジョアジーに対する政府のこの父性的なやさしさ——これは全く証明を要せず、指摘だけで足りる事実であり、そしてわれわれがこのことを指摘するのは、ヨーロッパとは違ってわが国では国家がブルジョアジーの創造物ではなくて、反対にブルジョアジーが国家によって創られている、という事情をよりよく際立たしめんがためである。

わが国家の自主的な意義は極めて重要な事実を成している。このことに則応して、ロシアにおける社会革命党の活動が全く特殊な性格をとらなければならないからである。ロシアは、厳密に言えば、「ロシア国家」という商号の会社に属する広大な荘園の如きものである。経済的及び政治的影響、経済的及び政治的圧迫がここでは、当然のことながら、融合し、まとまって一つの法人格、この会社そのものをなしている。かかる条件の下では政治的改革と経済的改革は、同様に完全に相互不可分になり、まとまって一つの総体的国家的変革をなす。国家が人民の災厄、奴隷状態及び赤貧の直接の源である<sup>1)</sup>。この故に、人民を解放し、人民に土地を分与し、人民を啓蒙し、人民の生活の中に新たな諸原理を導入し、あるいは人民の生活の古い伝統的諸基礎をその始源的な純粹性において再建することをわれわれが目的とするや否や、一言でいえば、如何なることを目的とするにせよ、この目的を大衆の利益になるように設定しさえすれば、われわれは、自己の経済的及び政治的奴隷と人民をみなしている政府と、好むと好まざるとを問はず、衝突せざるを得ない。人民のために何かをするためには、何よりも先づ人民をこの政府の権力の下から解放し、政府そのものをくじき、政府から百姓に対する主人としてのその権力を奪わなければならない。このようにして、われわれの活動は政治的性格をとる。そしてこのことはわれわれの間で、

1) (原註) 国家という言葉でわれわれが理解しているのは常に正しく現在のロシア国家であることに注意をお願いする。

その理論的見解にかかわらず一切の革命派に、言葉の上ではともかくも活動の面で、現実に起っている。現在の政府がすべての面で真に最も恐るべき、最も強力な人民の敵で破壊者であるという単純な事情から起っている。わが社会主義者が政治闘争を行うことの当然なることは、散文と詩について概念すらも全くもたない人が散文で語ることの当然なるが如きである。それにもかかわらず、この事実——現在の国家の意義——を理解しているか、これを理解していないか、の差は、勿論大きい。もしわれわれが意識的に活動するならば、われわれは正にそのすべての打撃をこの政府にむけるので、その時にはわれわれの力は生産的、有効な仕事にむかうであろう。しかしもしわれわれが、自らの希望や意向にはかかわらず、ただ偶然に政府を打倒するならば、その時には第一に、力の大きな割合が幻想的で結果のない仕事に消費される可能性があり、第二に、われわれが偶然に政府に加える打撃そのものも、利益をブルジョアジーにだけもたらし、そのより容易な勝利を準備するであろう。しかしこれについては後にのべる。

ここでわれわれは予め釈明しておく必要がある。われわれが、政府との闘争、政治的変革を党に呼びかけながらも、社会的経済的変革を決して捨ててはいないことは勿論である。われわれは、わが国家秩序の下では政治的変革と社会的変革は完全に融合し、一方が他方を欠いては考えられない、といているにすぎない。この政治的社会的変革のために、新しい途、いや決して完全に新しくはなく、ただ現在まで党がよく意識していない途をわれわれは指示しているだけである。「人民の意志」第1号で土地に対する人民の権利を弁護した「土地と自由」の人々にこのような釈明が必要かどうか、われわれは知らないが、万一の場合の誤解をさけるために釈明しておく。

本題にもどらう。現在政府を弱くし、従って政治的変革への途をきよめる反政府闘争は、われわれが一步ごとに人民の活動的で自主的な敵としての政府にぶつかるような条件の下では、完全に不可避である。それは不可避であるばかりではない。それは、正に人民のために政治的変革を遂行するという意識的で意図的な目的をもつならば、人民に対する最も重要な歴史的奉仕たり得る。人民の手に国家権力を移すことは、現在では、われわれの歴史全体に、人民的な共同体的連邦的世界観の精神での全く新しい方向と発達を与え得るであろう。実際、わが政府が、どんな理由からにせよ（全国的な革命の結果、全住民層の精神的圧迫と関連して、自らの衰弱の結果、など）、自己の事業を解消することを余儀なくされる、と仮定してみよう。自主的に又は政府の招きに応じて、その選挙民の決定（制憲議会 *Assemblée constituante*<sup>1)</sup> の陳情書 *cahiers* に類したもの）をもたされた制憲議会が創られる。この議会では代議士の90パーセントが農民出身であり、そしてもしわれわれの党が十分に巧妙に動くと仮定すれば、党出身である。かかる議会は何を制定する可能性があるか。それがわれわれのすべての経済的及び国家的関係の完全な変革をわれわれに与えることは、非常に可能性がある。国家の圧迫から自由であった到るところで、わが人民が如何に身を処したかをわれわれは知っている。人民が、ドン、ヤイク、チェレク<sup>2)</sup>で、シベリアの分離教徒居住地で、自身の傾向だけに即応して自由に身を処した到るところで、その生活の中に発達させた諸原理をわれわれは知っている。人民の運動の永遠の

1) 国民議会 *Assemblée nationale* (1789—91) 又は *Assemblée législative* (1791—92) の誤りと思われる。

2) いずれもコサック集団の結成された地方。

標語をわれわれは知っている。土地に対する人民の権利，地方自治，連邦——これこそ人民的世界観の不変の原理である。しかし、これらの原理をうまく妨害できるような力は、ロシアでは国家以外にない。国家を除去するならば、人民は恐らく、われわれが希望し得る以上によく身を処するであろう。

人民に敵対的な様々な住民層が、自分たちの仲間で多数を占めて選挙の結果をゆがめる可能性があり、その時にはわれわれは、人民の理想と何ら共通のものをもたないような社会体制を受取るであろう、との反論がわれわれにむけられるかもしれない。これに対してわれわれは答える、これはなお疑問である、かりにわれわれ社会主義者＝革命家がない場合にすら疑問である、と。例えば、周知の如く、1849年にオーストリアの国会では、われわれのそれと同類のガリツィアの「百姓連<sup>1)</sup>」が自分達の候補者を送り出す能力をもち、そしてこの文盲の代議員たちが、自分たちの仲間の決定から一步も退かずに百姓の土地を頑強に守って、議会のいかなる策略にも屈しなかった。又わが国でも百年前にエカテリナの全国会議 *земский собор* において人民は、実によく彼等を代表した多数の代議員を送った<sup>2)</sup>。そこでもしわれわれの党が政治的変革の巨大な意義をすべて理解して人民をそれに対して準備することに今とりかかり、その後一せいに選挙戦を展開するならば、望ましい結果は最高度に可能性があるであろう。われわれの党がいかに弱くとも、しかもなお選挙では、人民の間で全く人気のない貴族層と、あるいは身分性をもつまでも成長しておらず、分裂し、孤立し、共通のプランも目当てもなしに行動しているブルジョアジーと、うまく具合に張合うことができるであろう。

かくして、政治的変革、即ち人民の手中への国家権力の譲渡は、巨大な、極めて人民に役に立つ、結果を今やよび起すであろう。今ならこのための時はなお逸せられていない。しかしもしわれわれが、政治的活動を軽視して、現在の国家の存在をなお教世代見のがすならば、これは必ずや人民の事業を数世紀間停滞させるであろう。現在の国家は、いずれにせよ、搾取者の結社のあまりに原始的、あまりに古代的な形態である。現在の生活は既にあまりに分化したので、これをこの古くさい国家がとらえることは絶対にできない。住民の要求はますます増大し、不満は成長し、住民の間に、国家よりも知的であるばかりでなくより組織されてさえいる分子が現れつつある。かかる条件の下では、国家はその自己防衛にますます多くの費用をついやさざるを得ず、人民からしぼり取るものでは既に今やほとんどこの支出をおおえない。赤字の現れる時は遠くなく、その時にはわが国家は、異常な衝撃がなくてさえ、餓死する可能性がある。このことを意識して、わが国家は既に早くに住民そのものの中に自己に対する何んらかの支持を、いうまでもなく自己に相似的なものの、即ち同様に掠奪的な分子の間での、支持を求めている。事実国家はかつては貴族層をおし出した。しかし貴族層は何んにもならなかった。今ではそれはブルジョアジーに依拠しようとしており、最も熱心な助産婦として、人民のこの片輪の子供の安産を配慮している。今度はその努力は勿論成功を以て終り、そしてブルジョアジーは急速に成長するであろう。しかしその代りに、一度足場が出来たら、この老いぼれた国家の権力が自

- 1) ガリツィア（オーストリア領）東半の基本的住民＝農民はルテニア人即ち小ロシア人（ウクライナ人）であった。
- 2) 1767年夏エカテリナ二世が新たな法典の編集のため召集した国民各層の代表からなる委員会には、国有地農民の代表も加えられた。

分の上にあることをブルジョアジーが容認せず、それを自己に従属させることができることも、何ら疑いない。政治的変革は行われるであろう、しかしそれは、権力がブルジョアジーの手に移る、という意味においてである。われわれの役割はこの場合最もあわれなものになるであろう。われわれはその全存在によって、その全活動によって、知らず知らずに、国家を掘りくづし、ぐらつかせ、弱体化した——そしてこれがすべて本来は、ブルジョアジーがより容易に国家を征服してその代りに座り得るためなのだ！ が、権力をその手に収めたら、ブルジョアジーは勿論現在より根本的に人民を債務奴隷化することができ、獄舎や絞首台以上には視野の及ばない現在の国家よりもより有効な、われわれの活動を麻痺させる方法を見出すであろう。われわれは既に読者の注意をこの危険にむけた。そして今改めてくり返す、われわれに必要なのはなんらかの一貫した行動方式を採用することである、と。即ち、国家と同盟し、これと結んでブルジョアジーをその芽のうちに圧殺するか、それとも——というのは、この同盟が明かに最もばかげたことであるから——国家とたたかうかであるが、しかし、もしそうとすれば、それは既に、おそくならないうちに、権力が実際に人民に移る機会がなお存在するうちに、出来るだけ早く人民の手に国家権力を移す、という一定の目的をもち、確かな結果をもつ、意識的な、容易ならぬ闘争である。今やるか、それとも決してやらないか、これがわれわれのジレンマである。

.....

### 資料 III

#### 革命における人民大衆の望ましい役割<sup>1)</sup>

およそ蜂起とは、人間が予測し、神が目論む、ということわざの主に証明されるような事柄である。多少とも予期されざる多くの事情が、人間の計算の途上に、時にはこれを妨げ、時にはこれを助けて現れる。蜂起におけるこのような未知量の一つが人民大衆である。非常にしばしば、誰が見ても熱い、泡立っている大衆が、決定的な瞬間に指一つ動かさず、反対に打ちひしがれた、不活潑な群集が、全く思いもかけずエネルギーと自主性を示す。全国的な飢饉に見舞われている今年<sup>2)</sup>は、昨年なら空想することしかできなかったような気分と本能を人民の間によび起す可能性が十分あり、現在においてすら完全には知ることのできない大いさを、多分革命運動の中へ引入れるであろう。

それにもかかわらず、諸条件の一切の結合をできるだけ予見する必要がある。そして正にこの故に、革命における人民大衆の望ましい役割に関する問題を議論の余地なく提起するのに、現在は何時よりも時宜に適しているようにわれわれには思われる。人民に対する誠意のない関係という非難、「人民の意志」の若干の原則的反対者<sup>3)</sup>たちが——やはりとても誠意があるとはいえない態度で——われわれに向けた非難を、その際わが身から除きたいが故に、それだけにわれわれは大いに好んでこの問題を提起する。

人民がもつことのできる最も高価な性質の一つは政治的、市民的発達である。政治的発達は、最も不利な条件の下にあっても、完全な経済的崩壊の場合にも、一面に掠奪者の群

1) Лит. стр. 289—94

2) 1880年。

3) 「黒土再分割党」の人々のことである。資料 IX を参照。

が存在している場合にも、外国支配の危険の下であっても、人民を救うことができる。人民の中にその最高の諸権利に対する信念が生きておれば、人民の中で村に始って宮廷に終るすべての国家=社会的事項を監視する習慣と能力が強ければ、如何なる災厄も恐れるに足りない。政治的発達に欠けている時には、これに反して、自然のゆたかさも、民族の智能や性格の立派な性質も、広汎な社会的感情も人民を窮乏と奴隸状態から救わない。いずれの革命の後にも通常認められる好い結果の原因は、一部は社会形態そのものの改善であるが、一部は正に人民の政治的発達の向上のおかげである。勿論、時には革命期における人民の創意の最初の数歩はたどたどしく、時には最も粗野な激情と本能がはっきり現れる。しかし、それはともかく、人民は、勝利して、自己の権利を意識し始める。運命の恣意にまかされ、いつもの後見人を奪われた人民は、社会関係を組織すること、自己の代理人を監視することなどを学ぶ。一言でいえば、大いに公民になる。そしてその後、革命の動揺がおさまって生活が次第にその普通の軌道を進むようになる時、人民の政治的発達の向上はすぐに、一切の濫用、法律違反、恣意の減少の形で現れる。生活がしやすくなる。

この故に一切の蜂起は、それが人民革命の先駆又はエピソードでありさえすれば、換言すれば、蜂起が人民革命に刺戟を与えさえすれば、最大の結果をもたらす。われわれの情勢全体を考量できる限りでは、ロシアでは事態はこのように進むであろう。しかしわれわれが成功する叛乱を自然発生的な人民運動より先に準備できるようになるにせよ、あるいは人民運動がわれわれの見当より先んずるにせよ、両方の場合とも、われわれは、党によって組織された力をいわば人民的力の解放のために、人民大衆の意識的政治勢力への転換のためにむけて始めて、これを最も生産的に使うことができるようにわれわれには思われる。われわれが絶えず、人民への権力の譲渡について、人民の意志について、人民の独裁について語っており、又語って来たのは正にこのためである。人民にとっては、よりよい社会形態に到達することが重要であるが、より重要なのは自分でこれに到達することである。人民にとって最も重要なのは、彼等人民が自己の運命の現実的処理者たるような歴史的瞬間を体験することである。こうした瞬間は決して忘れられることなく、住民を市民にする。

われわれが党の解放的役割を如何に理解しているかを浮彫りにするために、われわれは明瞭な例をあげよう。しかし、読者がわれわれの言葉の中に行動計画の説明をみないように切にお願いする。革命的空論派だけが十年先までの計画を考え出す。が、本当の生きた革命家は、その基礎理念を情勢に適用し、情勢に応じて実現する、というたった一つの計画しかもたない。だからわれわれが語るのは専ら、より明瞭にするために、例としてである。党が十分な力を組織し、全人民的運動を待ちおおせ、自主的に活動し始め、中央権力を獲得した、と仮定しよう。党の爾後の役割は何か。新しい国家体制を創り、必要な改革を命ずることか。われわれは考える——否、と。最も不幸な場合にだけ、人民という有機体をも早一つも生命の火花を現さないような時にだけ、このような活動を承認することができるであろう。が、普通の時には党の義務は、獲得した権力と手段を全ロシアの革命化のために使うこと、即ち到るところで人民に権力の奪取と秘められたその希望の実現を呼びかけ、人民をこの点で全力をあげて助け、そして自己の中央権力を専ら人民の組織化を助けるために手に握ることであろう。

革命の主要な創造力は人民の中にあり、そして創造の事業は大衆がそれに参加すればす

るほど鞏固であることを、一般に原則はわれわれに示している。闘争と破壊の事業に問題を移しても、やはりわれわれは、人民の参加なしにはそれは甚だ妄想的である、と断言する。政府は革命の瞬間に二つの原因から、即ち第一に革命軍の攻撃の結果、第二に自らの軍隊の崩壊の結果、打撃をこおむる。しかし、短期間にせよ政府を粉碎するのに十分な軍隊をつくることは、人民の参加なしには考えられない。インテリゲンツィアは数千の戦士を一時には組織する能力がないからである。一方政府軍の崩壊は著しい程度において、時には他ならぬバリケードで感染する大衆の反政府的気分の結果、起る。党の側からの大衆への働きかけと大衆との堅い結びつきは、かくして、われわれにとって成功の重要な条件をなしており、手段に順応する必要だけから、われわれは勢力の一定の節約を予儀なくされている。現在の準備期においてすべての地方が一様の革命的意義を有しているのではなく、そして、勿論、主な注意を要求しているのは比較的重要な地点である。一般にそれは大都市である。大都市が闘争のすべての重荷を負わなければならないであろう。大都市において党の力は最も強くなければならない。時が違えば、不満を特に尖鋭化させ革命的気分を高める諸事情の併発によって、同じような意義を様々な農民地方が取得する。それは同様に党の側からの即刻の働きかけを要求する。約言すれば、人民大衆との結びつきは一般に必要なが、それによって叛乱の最初の成切が保証される時には、この結びつきは既に完全に義務的である。

#### 資料 IV

#### 政治革命と経済問題<sup>1)</sup>

未だかつて如何なる社会革命党にも、ロシアの社会革命党に歴史が課した課題ほど困難で複雑な課題が課せられたことはない。社会=経済的なその基本的な課題と共に、われわれは更に政治的専制主義体制の破壊の作業、即ちヨーロッパでは到る処ですっと以前に、しかも社会主義者たちによってではなく、ブルジョア政党によってなされたこと、を引受けなければならない。それ故にヨーロッパではどの社会主義政党もわれわれのように困難な闘争にたえ、犠牲を払う必要がない。しかし、このような条件の下で働いて人民解放の旗を高くかかげるためには英雄的な努力が必要であるとしても、その代りに、こういった条件には、われわれをかこんでいる政治的環境には、将来におけるわれわれの課題の実現に有利な側面も含まれている。現在一つの社会階級をも満足させることなく、全インテリゲンツィアに憎まれている政治体制は、近い将来に不可避免的に崩壊するに違いない。しかしこれと共に、人民を飢餓と全滅に導いて来たこの体制は、それが支持している経済秩序のためにも墓穴を掘っている。現在の政治組織の分解過程は、年ごとに漸進的に強化される人民の経済的窮乏化過程と同時に起った。そして勝利する人民運動による現政治体制の破壊も不可避免的に、現存国家と離し難く結びついている経済秩序の壊滅を同様にもたらすであろう。

この故にわれわれは、われわれの党にとって国家との政治闘争は、われわれの社会主義

1) Лит., стр. 336—343

的活動における副次的要素ではなくて、反対に経済上の（あるいは、少なくとも、農業上の）変革の時期を早める強力な手段、即ちわれわれの綱領の一部を実現する手段である、と考えている。

ロシアの現実の諸条件の下でかかる観点に立つときわれわれにとって如何なる実践的課題が生ずるかを、われわれは以下に概括的に述べるが、今はわれわれは、われわれの綱領の政治的部分に対してなされている様々な理論的反論に答えなければならない。これらの反論はすべて、ある国の社会経済的発達にとっての政治形態の意義に関する問題をめぐるものである。

この問題に関する、様々なユアンスの社会主義者たちのすべての意見は、三つの典型的なカテゴリーに分けることができる。第一のカテゴリーには、上からの権力の命令と下からの臣民又は市民の服従のみによって如何なる経済上の変化でも国内に起す力を政治形態に認めて、これにあまりにも大きな意義を与えるものが属する。その実践的な課題についていえば、これは大分部ジャコバンであり、権力をその手に奪うことによって政治上及び経済上の変革を命じ、人民の生活の中に上から社会主義的諸原則を持込んでその際實際の改造への人民の積極的参加をよび出すことなく、そして人民の革命的イニシアティブを「考慮の上で」圧迫しさえしようとしている「国家主義者たち государственники」である。われわれの間で、ジャコバンの傾向の機関誌はトカチーフ氏が出している新聞「警鐘 *Набат*」である<sup>1)</sup>。第二のカテゴリーには、反対に、経済関係に対する政治形態の肯定的乃至否定的な、深刻な意義を一切否定して、政治形態に対して社会経済生活において僅かの意義しか認めない社会主義者が属する。この故にこの人たちは、その実践的課題においては、その勢力の如何なる部分にせよこれを政治闘争にささげることが、社会主義者にとって無益な、そして有害でさえあることと断定している。この傾向のわれわれの間での代表者は、「黒土再分割」をその機関誌としている党派（あるいは、より正しくは、党派の一部）である。最後に、この二つの一面的な意見の総合の役割を果しているのが、政治的要素と経済的要素の密接な関連と相互作用を認めて、経済的変革も一定の政治的变化なしには実現し得ず、反対に自由な政治制度も経済の分野での一定の歴史的準備なしには確立し得ない、と考える見解である。われわれの党派とわれわれの機関誌がとっているこの見解は、これから更に詳しく展開するが、ここではわれわれの反対者たちの論拠をとりあげよう。

われわれの綱領の政治的部分に同意しない人たちはしばしば、ある国の経済的關係と形態はその他のすべての社会形態——政治的形態、法制的形態など——の基礎であることをその「資本論」で証明したマルクスを引用し、そこから、あらゆる経済關係の変化は同じ経済の分野での闘争の結果としてのみ起り得、それ故如何なる政治形態、如何なる政治革命も経済的変革を引とめることも引起すこともできない、ということを出している。マルクスの生徒たちが教師自身よりも行きすぎて、本質的には正しいマルクスの説明から不合理な実践的帰結を引出していることに注意しよう。マルクスが彼等のように考えていないことの証拠として、彼の「フランスにおける内乱」から、彼がパリ・コンミュンの意義を規定している箇所を引用しよう。「これは、労働の経済的解放が実現さるべき、最後

1) 1875年11月ジュネーヴで発刊。1881年9月終刊。但しトカチーフ П. Ткачев は1877年に編集部を去っているため、本文の記述は不正確である。

に見出された政治形態であった。……この故にコンミュンは、階級の、従って又階級闘争の、存在が依拠している経済的基礎の破壊のためのこの役目を果たすべきであった。」同様な言葉は、コンミュン崩壊の直後に出されたインターナショナル総会の布告の中にも見出され、従って、それらの言葉の中に表現された思想は、ヨーロッパの社会主義の極めて多数の代表者たちが同意しているものである。純粹経済理論の信奉者たちが、誤解から、時には同様に引用している第二の権威ラヴロフ氏は、最近出たパリ・コンミュンに関するその本の中で、次のような助言を将来の革命の活動家たちに与えている。「歴史の組合せがどこかの国の労働者に、一時的にせよ敵を制圧して事件の流れを支配することを許す瞬間には、目的にかなった手段——この手段がどのようなものであるにせよ——によって、経済的変革を実現し、この変革に、それが可能な限り、耐久性を保証しなければならない。」ところで、経済的問題の政治的解決法がラヴロフによっても「目的にかなった」手段から排除されていないこと——このことは彼の書物全体から明かである。例として、コンミュンの時にインターナショナルが果たした相対的に小さな役割についての彼の説明を引用しよう。「純粹に経済的な諸問題にむけられ、そして如何なる政治綱領をも自己の経済的要求に従属させておし出さなかつたインターナショナルの煽動は、情勢がヨーロッパの最も重要な地点の一つにおいてプロレタリアートの勝利の爆発を起させた他ならぬその時に、役に立たないことがわかつた。」

更に、なんらかの国家的措置によって大少を問はず経済的変革を実現することが可能と考えたルイ・ブラン、ラッサール、ブルードンやその他のすぐれた社会主義者たちの名前をあげることができるであろう。更に、その遺稿「社会主義についての覚書」において、普通選挙権の中に、労働者階級が、その利益を自覚して、この政治的権利を社会革命の道具に変える、将来における経済的変革の萌芽を見ているブルジョア経済学者＝折衷主義者ジョン・ステュアート・ミルの意見を引用することもできよう。しかしわれわれは専ら経済的な闘争の信奉者たちが好んで引用している二人の著述家の上に引用した意見だけに止めよう。そしてここでヨーロッパ生活の事実を目をむけよう。

フランス大革命の時、国民公会は聖界と亡命貴族の土地を没収して、この土地を先づ国有財産とし、次いでこれをブルジョア階級に売却した。確かにこの方法は土地私有の原則そのものは変えなかつた。しかし何故国民公会は経済的変革を実行しなかつたのか。即ち私有者からすべての土地と工場を取上げず、それを人民の集団的利用に委ねなかつたのか。勿論既にそれは、経済的問題の政治的解決方法がおよそ不可能だからではなく、当時社会問題が歴史によって日程にのぼされていなかつたからである。更にフランスにおける48年の革命をとり上げてみよう。当時パリのプロレタリアートの間に、一定の政治的及び経済的綱領をもち、誠実にして果敢な指導者をいただく鞏固な組織が存在したならば、ルイ＝フィリップの顛覆に始まる革命はフランスの経済体制の深刻な変化をもたらす得たであろう。71年のパリ・コンミュンは既に、政治的方法による経済問題解決へ最初の歩みを歩み出した。

こうなつた以上、経済的変革実現の道具として国家組織を利用する政治革命が完全に可能なることを反駁することができようか。勿論、経済的変革は歴史によって予め準備されていなければならない。即ち、実現した政治革命が、国家組織をとらえて、経済関係において人民に意識され望まれていることを実現し得るためには、経済諸力の事実上の相互関

係の中に、又同じく人民大衆の理念と慣習の中に一定の変化が予め起っていなければならぬ。

われわれは正に、ロシアの国家体制は、完全な官僚的恣意の制度として特徴的なばかりでなく、同じくその後進性の故に、又人民大衆の経済及び法律上の制度、慣習及び観念との対立の故にさえ、特徴的である、と考える。わが国家は、人民の経済的要求からおくれた政治制度がもち得る巨大な否定的意義の一例として役立っている。ヨーロッパでは政治的進歩は社会経済的進歩に先行し、政治的形態は、特に革命の際、経済問題を提起するための、又経済的変革を実現するための、手段の役目を果している。ところがわが国では政治制度の不断の圧迫が、この制度の崩壊と共に、又人民の革命的イニシアティブが自由に発現する可能性と共に不可避的に現れるであろうところの、経済上、法律上及び政治上の再組織を抑止している。事実、一連の無数の歴史上の、又現在の諸事実は、人民生活の諸原則が現在の国家の支えとなっている諸原則と全く対立することを、反駁の余地なく証明している。われわれは国家の考え方と人民の考え方の乖離というこの事実にこれ以上かかずらうことをやめよう。この事実は多くの人によって、社会主義者でない人によってさえ認められており、勿論わが「農村主義者たち *деревенщики*<sup>1)</sup>」もこれに同意しているのであるから。われわれは、わが国の経済生活に対する国家の影響の次の二つの大きな事実に彼等の注意をむけるだけにしよう。第一に、政治制度が人民の共同体的諸制度に与えている破壊的にして墮落をもたらす影響、第二に、国家が有産階級に与えている保護、即ち毎年政府が人民の資産から引張り出して、わが国に生れつつあるブルジョア身分に手渡している数億。結局、この怪物的な警察的＝クラーク的制度全体を維持するために国家は、人民に飢餓と貧窮と絶滅しか残らないほど大量の人民的労働の生産物をむさぼり喰うことを必要としている、ということがわかる。

この他、注意しなければならないのは、わが国にはヨーロッパにおけるような自主的にして鞏固な組織をもった身分が存在しないことである。ヨーロッパでは国家権力はある身分の事実上の支配の政治的表現にすぎないが、わが国では反対に、国家がその裁量で、いくつもの身分を創ったりこわしたりし、特権階級を対象に勝手な実験をして、その際この階級の間から起って来るどんな弱い（多く、個人の）対抗の試みでもこれを抑圧した。絶対に無制約であろうとして、国家はあらゆる政治的自主性を、特権階級のそれであっても抑圧し、このために彼等の間における分裂と非組織を支持した。このような政策は勿論国家の集中された権力を強化したが、しかしそれと共にこれは現在の制度を将来最終的に破滅させるに違いない。事実、一度国家的集中が人民運動の波にさらわれるなら、如何なる社会的要素が、事件の進行を支配する現実的な力と認められるであろうか。勿論、その分裂性の故に特権階級も、その非組織性の故に合法政党も、人民運動に対抗して経済的人民奴隷化の旧体制を維持する力をもたないであろう。人民と社会革命党だけが、変革後に社会及び国家体制の依存する主要な力であろう。従ってわれわれは再び同じ結論に到達する。即ち、わが党にとって最大の破壊作業は、現在及び将来において、再び、よりよい体制の実現に有害な、唯一ではないにせよ主要な事実上の力としての国家に向けられるべきである。

1) 「黒土再分割」党を中心とする土地革命優先論者たちのこと。

ロシアの生活における国家の意義の評価のためにもう一つ意見を述べる。大小を問はず農民層の間に叛乱をよび起した動機に注意をはらってほしい。それらの動機は常に政治的又は法律的性質のものであって、上から、国家又は行政機関の領域から出て来た。即ちそれはあるいは偽ツァーリ、僭称者であり、あるいは架空の「黄金勅書」であり、あるいはなんらかの（人民の解釈による）法律違反であり、あるいは、最後に、農村住民に実例を示す都市蜂起である。しかし、どこかの村なり地方なりが、外的動機又は実例なしに、彼等が飢えているというだけで蜂起した場合は恐らくなかった。人民が彼等の権利の侵かされていることを意識するか、叛乱の成功に希望をもっているかすることが、その上に必要である。勿論、ほとんどあらゆる人民の動乱の基本的条件たりしものは物質的苦難であるが、常に動機の役割を果たしたのは、当局の側からの（実際の、又は相像上の）法律違反か、その利益において人民に近い何んらかの組織された核の内から出て来る蜂起の発端か、であった。

最後の条件は、歴史の示しているように、すべての大きな人民運動にとって不可欠である。事実、プガチョフ乱の時に、叛乱の潜在力を呼び起した刺戟の役割は、一方では運動を準備して組織した分離教徒の共同体によって、他方では武装叛乱の実例を示したコサックの一部によって果された。

しかし現在では、かつての戦闘的エネルギーの大部分を失った分離教徒も、農民に比して特権身分であるコサックも、明かに、人民叛乱に標語を与えることはできない。ただ社会革命党だけが、都市及び工場住民の間に強い地盤をきずき、農民の間に好都合な多数の地点を占めて後、都市及び農村の運動を惹起するのに必要な酵母としての役目を果たすることができる。しかし現存秩序の完全な抹殺のためには都市及び農村の同時的な叛乱が必要である。事実、最も広汎な農民運動も、これを支持し組織する党の側からのすべての努力にもかかわらず、集中され立派に装備された敵を制圧することはできない、この敵にその物質力と軍事力の中心において、即ち首府と大都市において大打撃が加えられなければ。全く同様に、都市における叛乱の一時的な成功すらも、農民層がこれに呼応する好意的な叛乱によって都市の事業を支持せず、そしてこのようにして敵の軍事力を分散させないならば、勝利を以て終りはしないであろう。この他、成功のためには、叛乱の時に軍隊とコサックが、一部でいいから人民の側につくことが必要である。しかし叛乱の最初の発端をつくるのは誰か——都市か村か。都市人口の大きな発達と可動性によって判断すれば、最後に、党の活動が村よりも都市で量的により大きな結果を与えるにちがいないことによって判断すれば、村ではなくて都市が叛乱の最初の合言葉を与えるであろうと考えることが必要である。しかし都市での最初の成功は数百万の飢えた農民の叛乱に信号を与えることができる。

## II 党の綱領

党の具体的な革命方式が述べられている綱領は党の革命理論を知る上に不可欠の資料である。Литература п. Н. В. に収められている綱領類のうち最も重要なのは「執行委員会綱領 Программа исполнительного комитета」で、次いでこれを補足するものとして「党の準備工作 Подготовительная работа партии」が大切であり、「<人民の意

志>党労働者党员綱領 Программа рабочих членов п. „Н. В.“と「軍=革命組織綱領 Программа военно-революционной организации<sup>1)</sup>」も重要な箇所を含んでいる。以下「執行委員会綱領」の全文と他の三つの資料の重要な部分を紹介する。

## 資料 V

### 執行委員会綱領<sup>2)</sup>

#### A.

その基本的な確信によって、われわれは社会主義者にしてナロードニキである。人類は社会主義の原理の上に立ってのみ、その生活の中に自由、平等、博愛を実現し、共同の物質的福祉と人格の完全円満な発達を保証すること、従って又進歩をも保証することができる、とわれわれは確信している。人民の意志のみが社会的諸形態を是認することができ、人民の発達は、それが自主的且自由に行われる時、生活の中に具現さるべきどの思想もあらかじめ人民の意識と意志を通る時にのみ、鞏固である、とわれわれは確信している。人民の福祉と人民の意志が、最も神聖にして不可分に結ばれたわれわれの二つの原理である。

#### B.

1) 人民が生活し且活動しなければならない環境を注視するならば、われわれは、人民が経済的及び政治的な完全な奴隷状態の中にあることを知る。勤労者としては——人民は専ら寄生者層を養い育てるために働いている。市民としては——人民は一切の権利を奪われている。ロシアの現実全体が人民の意志に対応していないばかりではなく、人民はこれを表明し表現することすらできない。人民は彼にとって良いことといやなことについて考える可能性さえ有しておらず、なんらかの人民の意志に関する思想そのものが現存秩序に対する罪とみなされている。あらゆる方面から圧倒されて、人民は肉体的退化へ、愚鈍、萎縮、赤貧へ——すべての面での奴隷状態へ追い込まれている。

2) 鎖につながれている人民の上にわれわれは、国家が創り擁護している、人民におおいかぶさる搾取者層を認める。われわれは、この国家がこの国で最も強い資本主義勢力を構成していること、同じこの国家が人民に対する唯一の政治的圧制者を構成していること、専らこのおかげで小さな掠奪者どもも存在し得ていることを認める。この国家的=ブルジョア的ぜい肉は専らむき出しの強制によって、即ちわが国におけるジンギスカンのモンゴル人がそうであったのと全く同様に、自己の軍事、警察、官僚組織によって、支えられているのをわれわれは見る。人民の希望や理想と何ら共通のものを有していないこのような国家的及び経済的諸原則と諸形態を力によって導入し維持しているこの気ままにして暴力的な権力が、人民の是認を全く欠いているのを、われわれは見る。

3) 人民そのものの中にわれわれは、その古い伝統的な諸原則、即ち土地に対する人民

1) これは軍隊内の「人民の意志」党の組織の綱領である。

2) この綱領が採択された年月日はわからないが、これは始め「人民の意志」第3号(1880年1月1日発行)に発表され、後単独にも印刷され、その際最後の項目(F)が追加された。このため Литература ではこの資料を第二部(文書)ではなく、第一部(定期刊行物)の「人民の意志」第3号の一部として収めている(Лит., стр. 162—66)。ただし、この部分の台本は「人民の意志」印刷所の印刷による「綱領」第3版(1881年8月15日)であり、又註の形で最後の項(F)が附記されている。

の権利、共同体及び地方の自治、連邦制度の萌芽、良心と言論の自由が、あらゆる圧迫にもかかわらず、なお生きているのを見る。人民が欲するままに、自己自身の傾向に従って生活し身を処する可能性を得さえすれば、これらの原則は広汎に発達し、人民の精神にあった全く新しい方向をわれわれの歴史全体に与えるであろう。

## B.

1) この故に、社会主義者にしてナロードニキとして、われわれは人民を抑圧している現存国家の圧迫を人民から取除くことを以て自己の緊急の任務とし、権力を人民に移すことを目的とする政治的変革を実行すべきものとわれわれは考える。この変革によってわれわれが達成するであろうことは、第一に、人民の発達が今や自主的に、それ自身の意志と傾向に従って行われるであろうことであり、第二に、われわれと人民に共通の多くの純粹に社会主義的な原則が、われわれのロシアの生活において承認され支持されるであろうことである。

2) 人民の意志は、自由に普通選挙で選ばれる、選挙民からの指示をもたされた、制憲議会によって十分によく表明され、提起されるであろう、とわれわれは考える。勿論これは決して人民の意志の表明の理想的な形態ではないが、現在において唯一の実現可能なものであり、この故にわれわれは正にこれを選び取ることを必要と考える。

3) かくしてわれわれの目的は、現在の政府から権力を奪いとって、今述べたような構成をもち、わが国のすべての国家及び社会制度を点検してその選挙民の指示に従ってこれを改造することを任務とする制憲議会へ、権力を移すことである。

## I.

われわれは、完全に人民の意志に服しながら、しかもなお党としては、自己の綱領をもって人民の前に現れることを義務と考える。われわれは綱領を変革の時まで宣伝し、選挙戦の時に勧告し、制憲議会において擁護するであろう。その綱領は次の如きものである。

1) 上に述べたような構成をもち、すべての全国家的問題において全権を有する恒常的な人民代表制。

2) すべての官職の選挙制、ミールの自主制及び人民の経済的独立によって保証される広汎な地方自治。

3) 経済上及び行政上の単位としてのミールの自主性。

4) 土地の人民への帰属。

5) すべての工場と製造所を労働者の手に移させる諸処置の制度。

6) 良心、言論、印刷、集会、結社及び選挙戦の完全な自由。

7) 身分上及び財産上の制限をとみなわない普通選挙権。

8) 民兵を以て常備軍に代えること。

われわれは、この綱領を今後遂行し、この綱領においてはすべての点が他を除いて単独では不可能であって、全体がまとまって始めて人民の政治的及び経済的自由とその正しい発達を保証する、と考える。

## II.

上述の目的にかんがみ、党の活動は次の諸部門に配列される。

1) 宣伝及び煽動活動。

宣伝は社会改革の手段としての民主主義的な政治的変革の思想をすべての住民層の中に

普及すること、並びに党の本来の綱領の普及を目的とする。現存体制の批判、変革と社会改革の方法の説明と闡明が宣伝の本質をなす。

煽動は、現存秩序に対する抗議と党の精神における改革の要求、とくに制憲議会の要求が、人民と社会の側からできるだけ広汎に現れることを狙うべきである。抗議の形態として可能なのは、集会、示威、請願、一定の傾向をもったメッセージ、納税拒否などである。

#### 2) 破壊及びテロ活動。

政府の最も有害な分子をなきものにし、党をスパイ組織から守り、政府、行政機関の側からの暴力と恣意の最も重大なものを罰し、などするテロ活動は、政府の力の魅力をめちやめちやにし、政府に対する闘争の可能性を不断に証明し、かくして人民の革命的精神と事業の成功に対する信頼を高め、そして最後に、闘争に役立ち且慣れた勢力を形成することを目的としている。

#### 3) 秘密結社を組織し、それらを一つの中心のまわりに結合すること。

ありとあらゆる革命的目的をもった小さな秘密結社の組織は、党の数多い機能の遂行のためにも、党員の政治的育成のためにも必要である。しかしこれらの小さな組織は、より調和のとれた事業の遂行のために、しかし特に変革の組織に際して、完全な融合乃至は連合的同盟の諸原則に立って一つの共通の中心のまわりに必然的に編成されなければならない。

#### 4) 行政機関、軍隊、社会及び人民の中で有力な地位やつながりを獲得すること。

党のすべての機能を上手に遂行するためには、様々な住民層の中での鞏固な地位が最高度に必要である。変革との関連において特に重要なのは行政機関と軍隊である。これに劣らず真剣な注意を党は人民へむけなければならない。人民の間における党の主要な課題は、変革に対する人民の協力と、純粋に人民的な議員の選出を目的とする変革後の選挙闘争の成功の可能性とを準備することである。党は農民層の最もすぐれた部分の中に意識的な味方を獲得しなければならず、最も重要な地点において最も感受性の強い住民の中に大衆の積極的な協力を準備しなければならない。

#### 5) 変革の組織と遂行。

人民が抑圧されている事実にかんがみ、政府が部分的な鎮圧によって総体的革命運動を非常に永らく抑圧し得ていることにかんがみ、党は自分自身に変革そのものの発端を引受けるべきであって、党がなくても人民がやっつけていけるようになる時まで待つべきではない。変革遂行の方法については………<sup>1)</sup>

#### 6) 制憲議会召集の際の選挙運動。

変革が如何なる方法で——自主的な革命の結果としてあるいは陰謀の助けをかりて——行われるにせよ、党の義務は、制憲議会の即時の召集と、革命又は陰謀によって創られた臨時政府の権力のこの議会への譲渡とを助成することである。選挙戦に当っては党は様々なクラークの候補者に対してあらゆる方法でたたかい、全力をあげて純粋にミール的な人々をおし出すべきである。

### E.

執行委員会の行動の指導原理は、個人及び社会関係の関係によって次のように決定される。

1) (原註) 第5点のこの部分は発表されない。

1) 敵としての政府に関しては、目的が手段を正当化する、即ち目的に導く一切の手段をわれわれは許されたものとする。

2) すべての反対分子は、われわれとの同盟に入らないものも、われわれの援助と支持を受ける。

3) われわれと政府の闘争の外に立っている個人及び社会グループは中立的なものに見なされ、その人格と財産は不可侵である。

4) われわれと政府との闘争において意識的且積極的に政府を助ける個人及び社会グループは、中立から離れたものとして、敵方と見なされる。

執行委員会。

## 資料 VI

### 党の準備工作<sup>1)</sup>

党の準備工作は、党の諸目的の実現に必要な勢力を増大することを以てその任務とする。

この諸目的は何よりも先づ、人民の意志が法の唯一の源になるような国家及び社会体制を最も近い将来に創ることに帰する<sup>2)</sup>。これは最も近い目的であり、その達成後に始めて、宣伝と煽動をその主要な手段とする広汎な党活動が可能になる。

しかし党は、この最も近い目的の実現を志向する場合、現存の統治制度を廃棄する必要に迫られる。党は何よりも先づこのことを配慮しなければならない。現存の統治制度の廃棄は、勿論、極めて様々な経路で起り得る。例えば、老衰した政府が、叛乱を待たずに、人民に対する最も広汎な譲歩に出る決意をするかも知れない。これは旧い秩序の、いわば自然死であって、この場合には明かに、党の力は、現在の計画を捨てて、既に直接人民大衆の間における活動に向けられなければならないであろう。同様に、政府が、完全には降伏しないながらも、ある程度自由な憲法を与え、党にとっては、行動の自由を利用して自らをよりよく組織し強化するために、叛乱を延期する方が有利になる、ようなこともあるかも知れない。しかしすべてのこのような考慮は、現在、この時において、叛乱の準備をする必要を決して否定しはしない。というのは第一に、大小を問はず一切の譲歩は、政府がそれを強制される場合にのみ、政府の側から起り得るからであり、第二に、政府の側からの如何なる本質的譲歩もないということが大いにあり得る（そして九部通りは——ないであろう）からである。だが党はこの場合にもその任務を遂行する義務がある。この故に党は正しく叛乱の準備をしなければならない。もしそれが意外にも余計になるとしたら、それだけ結構である。その時には集積された力は平和的工作にむけられるであろう。

叛乱そのものについては、恐らくや、諸情勢そのものが陰謀者たちの任務を著しく容易にする好機を、叛乱のために選ぶことができるであろう。このような都合な条件は人民

1) この資料は、「＜人民の意志＞暦」に註付で掲載されたものがそのまま Лит., стр. 867—78 に転載されている。これが作成された年月日は不明であるが、内容から推して 1879 年末又は 1780 年と考えられる。

2) (「＜人民の意志＞暦」発行者の註) 党の最も近い任務のこのせん明は同時に、この組織がわがものとした名称(人民の意思)は本来何を意味しているのか、という問題に対する解答である。いうまでもなく、党員たちは自らを人民の意思の表現者や保持者とは考えていない。しかし彼等は、人民の意志がすべての社会的基準の決定者でなければならないような体制のために闘っている。それ故「人民の意志」という表現は、勿論、この闘争の最も自然で適切な標語である。

蜂起、敗戦、財政破綻、欧州政局の様々な錯綜などによって創られる。党は諸情勢のこのような好都合な併発をどれも機を逸せず利用すべきであるが、その予備工作に際しては、党はそのすべての希望をこれにおいてはならない。党は如何なる場合にもその任務を遂行すべき義務を有し、それ故最も悪い、最も困難な条件の下でも役割を果せないということのないように、その準備を進めるべきである。

このような最も不利な条件が現れるのは正に、党が、人民の運動に参加するのではなくて、自ら叛乱を始めなければならず、しかもその上最初の叛乱を容易にするような、異常な有利な偶発事が全くない場合である。そのような事態に対してもわれわれは準備をもっていなければならない。党は行動の好機を自ら創り、事を始め、最後までそれをやりぬく力をもたなければならない。現政府の大物 10—15 人を一時になきものにする、巧妙に遂行されるテロの企画の組織は、政府を周章狼狽させ、政府から行動の統一性を奪い、同時に人民大衆を鼓舞する、即ち攻撃の好機を創る、であろう。この瞬間を利用して、予め集結されていた戦闘力は叛乱を開始し、主要な政府機関を占領しようと試みる。このような攻撃は、党がある程度の有力な労働者やその他の大衆を最初の主謀者たちの救援に動員する可能性を確保するならば、成功裡に終らせることが容易にできる。成功のためには全く同様に、変革の最初の報せに接して地方を立上らせるか、せめて中立を守らせるかするに足るほど鞏固な状態を地方に準備することが必要である。全く同様に予めヨーロッパ諸国の側からの政府に対する援助から叛乱を守らなければならない。など、など。一般に、党の準備工作は、異常な有利な条件が一切なくても、即ち現在ロシアがあるのとほぼ同じ状態の下でも、党によって始められた叛乱の成功に必要なすべてを遂行しなければならない。

このような観点から、われわれの準備工作の主な課題は次のようなものである。

- 1) 叛乱を始める能力のある中央戦闘組織を創ること。
- 2) 叛乱を支持する能力のある地方革命組織を創ること。
- 3) 叛乱に対して都市労働者の支持を確保すること。
- 4) 軍隊を味方につけるか、又はその活動をまひさせる可能性を準備すること。
- 5) 準備工作に際して力の主な源たるインテリゲンツィアの共感と協力を確保すること。
- 6) ヨーロッパの世論を味方にひきつけること。

#### a) 中央組織

公然たる党活動を許さないわがロシアの条件の下では、中央組織は党からの選挙による代表の形では創ることができず、秘密結社の形をとるべきである。この秘密結社は、その前にある任務に相応して、戦闘的性格をもつべきである。……

#### 6) 特殊及び地方組織

……地方組織が革命の発端という意味で意義をもち得るのは例外的な場合だけである。大部分の場合その役割は、いうまでもなく、中央で始められた運動を支持し、政府に対する救援にその地方をおもむかさないことに帰する。しかしこの意味で地方組織の干渉は闘争の結果全体を決定する。革命の勝利の場合には地方組織の意義はさらに一層高まる。それは大衆の精神を鼓舞しなければならず、制憲議会への選挙に主に影響を与え、農

民層の要求に形を与え、などしなければならない。一般に、破壊的役割が主に中央組織にかかっているのと同程度に、建設的役割は地方組織にかかっている。これらすべてにかんがみ地方グループは予め、

- a) 行政機関と軍隊における地歩、
- b) 農民層に対する影響を確保し、
- B) 地方の自由主義者や立憲主義者とできるだけ親密になり、
- Γ) 物質的手段をたくわえ、
- Δ) その地方の実情によく通じていなければならない。

.....

行政機関と軍隊の中に地歩を得ることは運動の初期に特に重要である。この点での成功の達成は最も不完全なものすら、著しく事業の助けになり得る。叛乱の報に接して地方権力が政府に対する援助を企てる時、これを困惑させるのには多くを要しない。知事が、たとえ教人にしろ、彼の下僚の間に動揺をみる時、彼が倒れつつある政府と自己の運命を結びつけることの危険性についての指示を下僚から耳にする時、別の党员たちが社会、人民の間で示威を行う時、将校や特に個々の部局の長たちの間に二三の不服従が認められる時、これは既に、その県が今日は中立を守り、従って明日は革命家の手に移るのに十分である。この場合特に重要なのは軍隊であって、最も進んだ誠実な人々を党员として獲得し、残りのものの中に市民的感情を起して、軍隊の中で精力的に活動することを要する。先づ第一に注意を士官層にむけ、彼等を通じて兵士に働きかけなければならない。農民層については、大衆との親しい接触が可能な地点を占め、自己の行動によって彼等の尊敬を獲得し、彼等を助け、党の役員や有力者の協力に依拠して彼等の利益を守るべきである。大衆的宣伝は行わないが、しかし、農民のうちの優れた分子とは親しくし、彼等をできるだけ党の意識的な味方とし、彼等に党の目的をしらしめなければならない。自由主義者については、自己の急進主義をかくすことなく、党の任務が現在のように設定されている場合、われわれと彼等の利益は政府に対する共同動作を強めている、ことを指摘すべきである。

#### B) 都市労働者

その地位からいっても、大きな発達程度の点でも革命にとって特に重要な意義を有している都市労働人口は、当然党の真剣な注意をひく。最初の攻撃の成功は完全に労働者と軍隊の動きに左右される。もし党が予め労働者の間に、叛乱の時に工場と製造所を閉鎖し、大衆を動揺させて街頭に進出させる(勿論、叛乱に対する同情的関係を伴って、であるが)可能性をもつようなつながりを確保するならば、これは既に事業の成功を半ば保証するであろう。他方都市労働者は、その地位にもとづいて、純粹に人民的な利益の代表者であり、叛乱や、臨時政府の措置や、臨時政府の構成そのものに対する彼等の関係の積極性の程度によって、運動の全性格と人民に対する革命の有益の程度が著しく左右される。

この故に労働者の間で、1) 社会主義思想(広汎であればあるだけよい)と 2) 人民の要求実現の第一歩としての政治的変革と民主主義的政府建設の宣伝が熱心に行われなければならない。宣伝と並んで、労働大衆を結びつけ、彼等の間に利益の統一と一致の意識を発達させることを目的とする、その組織化が進められなければならない。労働大衆の組織化の遂行は、アルテリ、共同組合、自修サークル、ストライキから、純粹に革命的な団

体に至るあらゆる地盤の上で可能である。党员は進んだ人たち（インテリゲンツィアでも労働者でも同じである）から後者の種類のサークルを創り、前者の種類のグループを創るためにこのサークルのものをすべての工場と製造所にまきちらし、第一に労働大衆の水準をたえず引上げ、第二に彼等の中から新しい人物を指定して仲間に加え、第三に変革に際して最も広汎な労働大衆を動揺させる可能性をもつようにしなければならない。……

#### г) 軍 隊

変革の際の軍隊の意義は大きい。軍隊を味方にすれば人民の援助がなくても政府をくつがえすことができ、軍隊を敵にまわしたら人民の支持があっても、恐らく、何も達成し得ない、ということができる。しかし現在の条件下では、兵士の間での宣伝は、それに多くの希望を置くことができないほど困難である。士官層に働きかける方がはるかに好都合である。彼等はより進み、より自由なので、より影響を受けやすい。一方、変革の時には、勿論、何人も、然るべき指示と提案をその兵士たちにする人気ある士官よりうまくは、叛乱の側に兵士たちを引つけることはできない。最後に、中隊又は大隊の空気がそのような呼びかけを容れないとしても、しかもなお、指揮官は命令されたところに兵士たちをつれていかないことができ、彼等の射撃をおしとどめ、彼等を退却させ、目的のない転進によってくさせ、などすることができる。こうしたことすべてにかんがみ、士官層は最も注意深い働きかけの対象たるべきである。最も優秀な、最も進んでいて精力的なものは、意識的な党员としてこれを引つけなければならない。残りの多くのものについては、彼等の発達水準を引上げ、彼等に人民に対するその責任を説明し、彼等の眼前で政府の意義を損じ、革命家の目的を説明しなければならない。党员たる士官は二つの主要な目的を追求しなければならない、即ち、1) 昇進して重要な地位を得るか、2) 兵士の間で人気を得ることにすべての注意をむけるか、である。……

#### д) インテリゲンツィアと青年層

インテリゲンツィアと青年層は特に、すべての誠実な傾向が、味方を得るためには、自己のことを知らせさえすればいいような環境を構成している。この中での活動方法について多くの註釈は必要でない。……

#### е) ヨーロッパ

ヨーロッパに関しては、党の政策はロシアの革命に対して諸人民の共感を確保することにむけられなければならない。諸政府は、変りやすい政策と外交的利害をもっていて、多少なりとも恒久的なわれわれの同盟者であることはできない。……

### 資料 VII

#### 「人民の意志」党労働者党员綱領<sup>1)</sup>

(「人民の意志」編集部出版)

#### A.

諸民族は、その生活を社会主義の教えに従って、即ち次のように、建設する時始めて、

1) Лит., стр. 878—86

最大の幸福と勢力に到達し、人々は兄弟になり、自由で平等になる、ことを人類の歴史的経験並びに諸民族の生活の研究及び観察は説得的に且明白に証明している。

1) 土地と労働用具は人民全体に属すべきであり、そして一切の勤労者はそれを利用する権利がある。

2) 作業は単独にではなく共同で（共同体、アルテリ、組合によって）行われる。

3) 共同の労働の生産物は、決定に従って、すべての勤労者の間に各人の必要に応じて、分配さるべきである。

4) 国家機構はすべての共同体の連合的契約 союзной договор の上に基礎づけらるべきである。

5) 各共同体はその内部事項においては完全に自主的にして自由である。

6) 共同体の各成員はその信念と個人生活において完全に自由であり、彼の自由は、それが同じ又は外の共同体の他の成員に対する暴行に変わる場合にだけ、制限される。

.....

## B.

われわれは、このような社会及び国家秩序が人民の福祉を保証するであろうことを深く信じているが、しかし、他の諸民族の経験によって、人民の完全な自由と強固な幸福を一時に且最も近い将来に獲得することができないことも同様に知っている。われわれは政府や人民の富の浪費者との永い執拗な闘争——市民権の除々の獲得——に迫られている。政府と、現在気持ちよく暖く暮していけるそのすべてのたいこもちは、あまりにも長く、数世紀の間、人民を服従させ、おしひしいでおくために全力を尽して来た。彼等はこのことにほとんど常に成功して来た。実際、無知な人々は大部分の場合、彼等がその祖国の市民であって、帝冠をいただいた詐欺師や他人の労働やポケットをあさるあらゆる連中に国をまかせておくべきではない、ということを実感しておらず、又感じていない。貧しい飢えた人々はあまりにもしばしば強いもの、富めるもののおびえ、卑下し、更にだまされ、裏切られなければならない、それも日々の一片のパンのために。

この故に現在の人々は、金持も文なしもおらず、主人＝寄生者も召使い＝勤労者もおらず、万人が平等に保証され、万人が働き、万人が自由であるような良い正しい秩序の下では、調子よくおちついて生活することができないであろう。しかしながら気をおとしてはならない。現在はそのような秩序がわれわれに荷が勝ちすぎるとしても、完全な自由と幸福ではないにしてもいずれにせよより大きな自由とその生活の重要な改善を求めながら、次第にかかる秩序に近づかなければならない。よりよき秩序とよりよき生活の下で人々はより利口に、より道徳的になり、結局、自らが市民たること、即ちその国の全能の主人であることを発見し、更に前進する、即ち自己の生活を更によく、更に正しく建設する、であろう。この場合われわれ社会主義者＝勤労者の希望している社会及び国家秩序が、人々にとって、彼等が途に迷はず、新たな鎖、もっとひどい債務奴隷の状態におち入らないための導きの星の役割を果たすに違いない。

.....

## B.

.....

## I.

こうしたことをすべて考慮に入れて、われわれは、近い将来においてわれわれは国家体制と人民生活の中に次のような変化を獲得することができる、と認める。

1) ロシアにおけるツァーリ権力は人民政治によって代られる、即ち政府は人民代表(代議員)によって構成される。人民自身が代表を任命し、代え、選挙の際に、彼等が何を目ざすべきかを指示し、彼等の活動の説明を要求する。

2) ロシア国家は、住民の性格と生活条件によって、州に、その内部事項においては自主的であるが一つの全ロシア連合に結合される州に分けられる。州の内部事項は州庁によって、全国的事項は連合政府によって執行される。

3) ロシア帝国に無理に併合された諸民族は、これから分離するも全ロシア連合にとどまるも自由である。

4) 共同体(部落、村落、郊外、工場アルテリなど)は自己の事項を集会で決定し、これをその選挙制の役職(長老、百人長、書記、管理人、職長、事務係など)を通じて実施する。

5) 土地はすべて勤労人民の手に移り、人民の財産とみなされる。

それぞれの州は土地を共同体又は個人の用益にゆだねるが、これは自らその耕作に従事するものに限られる。何人も彼等自身が耕作し得る以上の面積を受取る権利はない。共同体の必要に応じて土地の再分割が定められる。

6) 工場と製造所は人民の財産とみなされて、工場と製造所の共同体の利用にゆだねられ、収入はこの共同体に属する。

7) 人民代表は法律と基準を出して、労働者の健康と生活に有害でないように、工場と製造所は如何に建てられるべきかを指示し、男子、女子その他の労働時間を定める。

8) 連合政府並びに州庁に代表(代議員)を選出する権利は、すべての成年がもつ。全く同様にすべての成年は連合政府と州庁に選出されることができる。

9) すべてのロシア人は、どのような信仰でもこれを保持し又はこれに改宗する権利(宗教の自由)、どのような思想又は主義でもこれを口頭又は文書でひろめる権利(言論及び出版の自由)、自分たちの事柄を審議するために集る権利(集会の自由)、どのような目的でもこれを追求するために団体(共同体、アルテリ、連合、組合)をつくる権利、代表の選挙の際及びあらゆる社会事項に際して人民に助言を与える権利(選挙運動の自由)を有する。

10) 下級及び上級の学校における人民の教育は無料で万人に開放される。

11) 現在の軍隊及び一般にすべての兵力は地方的民兵へかえられる。すべてのものが兵役の義務を負い、仕事や家族と切離されることなしに軍事を学び、法定の必要の際にだけ召集される。

12) 工場、製造所、農業及び一般に一切の産業及び教育関係の共同体、アルテリ、連合の維持と建設のために、ロシア各地に支店をもつ国立ロシア銀行が設立される。

これが、われわれの意見では、近い将来に人民生活の中で実現され得る諸変化である。全人民——都市労働者と農民——はその全き有益性を見出してそれを擁護することを辞し

ないであろう、とわれわれは考える。ただ都市労働者が理解すべきは、主な人民勢力は彼等ではなくて農民層にあるのであるから、農民層から分離すれば、彼等は常に政府、工場主、クラークから圧迫されるであろう、ということである。が、もし彼等が次第に農民層と連繫し、農民層を自己にひきつけ、共同の努力を以て一致して事をなすべきを証明するならば、その時には全労働人民は破砕しがたき力になるであろう。

## D.

.....

## E.

労働者連合（労働者組織）が正に如何なる条件の下で活動しなければならないかは、推測し難い。しかしその条件がどのようなものであるにせよ、一般的な基準を絶えず考えておくことは必要である。

1) 何ものかを獲得するためには、労働者は、政府を攻撃できて、必要とあれば武器を手にしてその要求を擁護することを辞さない力を構成しなければならない。事態が流血の闘争まで進むか、人民の敵がたたかわずに譲歩するかは同じことで、力を準備する必要があり、この力にたたかいを交える用意ができていればいるほど、それだけ速く敵はたたかわずに退くであろう。

2) 勝利への希望をもつて敵を攻めることができるのは、労働者組織がその一部として加わる社会革命党全体だけである。党は人民の中、社会の中で変革の実現のための力を集め、農民の中と都市労働者の中で、軍隊の中とその他の社会層の中で同盟をつくる。党は戦闘同盟を分出し、後者が政府を攻撃し、それを混乱させ、周章狼狽させ、こうしたことによって、すべての不平分子——人民、労働者及びそれに同情的なすべての人々が——立上って総体的変革を行うのを容易にする。

確実な叛乱が一度都市又は村に起ったら、党は自らの力でこれを支持し、その中に自己の要求を持ちこみ、可能性さえあれば他の地方でも同様な動揺を起させるべきであり、これらの動揺を一つの共通の叛乱に統一し、それを全ロシアに拡大すべきである。同時に政府を混乱させ、その文武の高官を倒す（高官であればあるほどよい）ことが必要であり、軍隊を人民の側に引つけ、これを解散せしめ、代りに農民、労働者、退役兵士及びすべての誠実な市民からなる人民軍を置くことが必要である。

事の成功のためには、大都市を占領して味方の側に保持することが極めて重要である。この目的をもって立上った人民は、敵を都市から追払った後すぐに、その臨時政府を労働者から、又は人民の事業への献身によって知られている人々から、選挙しなければならない。臨時政府は、人民軍に依拠して、都市を敵から守り、他の地方での叛乱をあらゆる方法で助け、叛乱参加者を統一し、指導する。労働者は臨時政府をすどく監視して、人民のために活動せしめる。叛乱が全国にわたって勝利し、土地、工場及び製造所が人民の手に渡り、村、都市及び州に選挙制の人民統治が確立し、国内に人民軍以外の兵力が存在しなくなる時、その時人民はすぐにその代表を制憲議会に送り、後者は、臨時政府を廃止した後、人民の達成したものを確認して全連合的秩序を確立する。代表たちは、彼等の選挙民が彼等に与えた正確な指令に従って行動する。

これが変革時における党活動の一般的プランである。

しかしながら他の場合もあり得る。

かりに政府が総体的一撥の恐れから社会に対してなんらかの譲歩をすること、即ち憲法を与えることを決意するとしても、労働者の活動はこのことのために変つてはならない。労働者は自己が力であることを示さなければならず、大きな譲歩を要求しなければならず、自己の代表を議会（即ち立法議会）に送りこみ、そして、必要な場合には、この要求を大衆的な声明と叛乱によって擁護しなければならぬ。人民の意志党は、このようにして政府を攻撃し、政府との闘争に力を発揮して、古い、不利な秩序が人民の要求に対抗し得ないことがわかる好機をひたすら待ち受け、成功の完全な希望をもって変革を実現する。

## 資料 VIII

### 軍＝革命組織綱領<sup>1)</sup>

現在の人民の経済及び政治状態は人間の尊厳にとって最も公正を欠いた屈辱的なものであること、現在の国家体制の下では人民生活における如何なる基本的改革も考えられないこと、この方面での最も素朴な試みすらも完全な失敗を以て終り、迫害を招くこと、従って、事物の自然の行程に事態をまかせるならば、このような状態は更に極めて永く続く可能性があり、その上それからの脱出はいよいよ困難になることについて社会革命党と完全に意見が一致し、更に、このような事物の秩序はロシアでは専ら粗野な力（軍隊、官僚及び警察）によって維持されているとの人民の意志党の確信を分有し、又、われわれの側からは、軍隊が政府の主な支柱であることを見ているので、われわれその軍隊の構成員は、政府の要求に応じてわれわれがロシアの国家体制の中で果しており、又将来果す可能性のある役割が誠実な人間にふさわしくないことをかたく信じつつ、ただちに人民の自由のための戦士たちに加わることを自己の義務と考える。

われわれの闘争により大きな完全さと一貫性をもたすために、われわれは、われわれの組織に入ったどの成員にも義務的な、われわれの創った次の如き綱領を採用する。

#### a) 全般的革命運動における軍組織の役割

- 1) わが組織は、上にのべた如く、人民の意志党との連帯を認める。
- 2) 組織は政治的及び経済的国家体制との闘争への積極的な参加に同意する。即ち人民叛乱の際にはそれへの参加に同意する。
- 3) 組織の成員は、人民代議制を設けるために、主権の奪取を目的とする専ら軍事的な叛乱に同意する。

#### 6) 組織の諸原則

1) 軍組織は、第一に軍隊内における革命勢力の活動の統一と規正、第二に出来るだけ多数の積極的活動家及び同盟者の誘引、第三に全ロシアの社会革命党との、相互援助及び支持のための、正しい結合の確立、という目的をもって起っている。

2) 兵士と将校との公式の会話の時に、又私的な会話の時にすら、最も人間らしいやり方さえ兵士の中でなくしてしまう、わが軍隊内で支配的な苛酷な規律は、下級者の中での活発な宣伝の可能性を将校から奪っており、それ故にわが組織に入ることが出来るのは將

1) Лит., стр. 886—91

校だけであり、下級者は、特務曹長を除いて、組織へ加入を許すことはできない。

.....  
B) 軍組織の活動  
.....

### III その他

「人民の意志」党の革命理論の展開は「黒土再分割」党との対立・論争に負っている点が多いので、後者による前者の批判の内容を知ることは、前者の革命理論を理解する上に重要である。資料 IX は特にこのために参考資料として紹介するものである。

「人民の意志」党の革命理論の形成と開展には、この党の理論家の他、社会的にも大きな影響力をもっていた党外のミハイロフスキーが特に大きな役割を果たしている。資料 X は、この点で特に注目すべき、「人民の意志」2・3号所載の「一社会主義者の政治的書翰 Политические письма социлиста」の主要部分である。

アレクサンドル二世の暗殺は「人民の意志」党の歴史の上で最も重要な事件であり、これと契機としてこの後党は次第に政治的テロの革命方法から後退する方向に進んで行くが、そうした意味で、資料 XI として紹介する「執行委員会のアレクサンドル三世宛の書翰 Письмо Исполнительного Комитета к Александру III」は、この事件直後の党の考え方を示しているので、特に貴重な資料である。

#### 資料 IX

#### 旧同志への公開状<sup>1)2)</sup>

公正な基礎の上に立つ社会の改造は経済的にして社会的な革命を伴わずには不可能であり、政治的クーデターは、決してそしてどこでも、人民に経済上及び政治上の自由を保証し得なかった、ことを歴史の経験はわれわれに教えている。その名前によってつい最近もなお人が革命を起したところの政治的自由の理想——人民の最高権、普通選挙——は今や全く力と魅力を失った。

近代の政治的革命家たちは、1789年のそれに始まり1848年のそれに至るまで、フランスばかりでなく全ヨーロッパにおいて、彼等の政治的理想の革新の力を熱烈に信じ、古い社会をこわしてその腐墟の上により公正な、彼等の理想の要求により適した新しい社会を建てるのにはクーデターで十分であると考えていた。……<sup>3)</sup>人間の諸権利、人民の最高権を前景において、これらの人々は、それを除いては全政治活動がシスフォスの仕事<sup>4)</sup>になるところの、経済的な現実的諸関係を無視した。

1) この公開状は「黒土再分割」党の機関誌「黒土再分割 Чёрный передел」の創刊号(1880年1月15日発行)に発表された。但しこの資料は原文をみる事ができなかったので、J.-W. Bienstock, Histoire du mouvement révolutionnaire en Russie, I (1790—1894), 1920, Paris, pp. 281—86 に引用されているものから訳出した。

2) 「旧同志」というのは、いうまでもなく、第二次「土地と自由」党時代に仲間であった「人民の意志」党員をさしている。

3) この資料の〈……〉は引用者即ち仏訳のものである。

4) ギリシア神話のシスフォス Sisyphos の話に由来して、無駄な骨折の意。

永い執拗な闘争の後、1848年に立憲思想は全ヨーロッパで勝利した。この勝利は、それ以来この思想の擁護に献身しているブルジョアジーの勝利でもあった。ブルジョアジーにとってこの思想は、彼等に敵対的な要素即ち王の力又は労働者の力に対する闘争の手段として必要であった。ブルジョアジーが人民にとって何になったかは、あまりによく知られている。

われわれは政治的闘争を故意に非難しはしない。しかし、われわれはそれを人民の間での革命的準備工作に依存させる。ロシアに関しては、この活動方法の必要性はほとんど数学的に証明されているようにわれわれには思われる。ロシアにおいて政治的クーデターをどのようにして実現しようかあなた方は考えているのか。あなた方はある階級を頼みとするつもりなのか、それともあなた方自身の力、党の力を頼みにするつもりなのか。宮廷又は軍隊の陰謀を除いては、わが国で現在政治的クーデターを実現するための他の途をわれわれは見ない。しかしわれわれは、あなた方が官廷陰謀という泥仕事で自らの手を汚しはしないであろう、と確信している。軍事革命については、われわれは何回もその重要性について語り、その帰着するところが何であり得るかを指示した。この場合ロシアは例外たり得ない。ロマノフ家は「神の恩寵に依る」その権利を闘争なしには放棄しないであろう。わが国には、ロマノフ家が彼等の助けをかりて反革命を組織し、陰謀を窒息させるのに十分な反動分子が、あらゆる分野に存在するであろう。その結果がどうなるかはいうまでもない。この他の階級については、あなた方自身これを計算に入れていない。少なくとも、現在のわが国家についてあなた方が与えている特徴づけにおけるあなた方自身の言葉を基にする限り。貴族、若いブルジョアジー、文筆家、学者などは、あなた方の考えでは、なんらの自主的な力をもっておらず、共通の利益によって、多小とも本心から、彼等が結びつけられているわが国家の一部をなしているにすぎない。彼等は、数世紀来彼等が服従している政府との闘争でその特権的地位とその富を危険にさらすには、あまりに受身で、あまりに闘争に不慣れで、あまりに金もうけに目がない。

残るのは、革命党の主要な構成要素たる、われわれの青年知識層と様々な階級に属している個人全部とである。自己自身と自己の諸原則を信じている、精力と活力に満ちた、相対的に数の少いこのグループは、政治的クーデターによって権力を入手するために何をなし得るか。このグループの闘争の唯一の武器は、最近の叛乱でポーランドのジョンドリ<sup>1)</sup>があれほど巧みに適用した如き、組織的テロである。しかしこの経験は、革命派の短刀が自由にとっても、又民族的独立にとってさえも、十分に安定した支点ではないことを証明した。およそテロ組織は偶然にのみ基礎をおいている。機会があなた方に幸いするでしょう。政府は、おどされ、混乱させられて、あなた方に譲歩を行うことを余儀なくされるであろう。それは議員を召集することに同意し、それは全国会議 *Zemski Sobor* を認める、一言でいえば、憲法を与えるであろう。しかして、これらすべての、人民にとつての（というのは、明かにあなた方は人民のために働いているのであるから）結果は何であろうか。現在あなた方が政府に対する直接の闘争の必要と立憲制度の必要をかくも強く主張しているのは、あなた方が、1) 経済的且政治的な階級としてのブルジョアジーの形成をわが国においてさまたげること、2) 人民の間におけるより生産的な活動のために途を準備する

1) *Rząd Narodowy* (人民政府) は 1863—64 年のポーランドの独立運動の時の革命派の地下政府。

ことを望んでいるからである。しかし、このように働くことによって、今は、あなた方は、その意に反して、宿命的に、反対のものを得るということを理解してほしい。わがブルジョアジーが政治力としては、なお潜在的な状態にあることは事実である。しかし、政治的には弱くとも、それは現在では——われわれの一般的な経済的困窮が原因で——唯一の強固な勢力である。……わがブルジョアジーは、常に慎重で小心ではあるがしかし、あなた方が惹起しようとする意図している混乱を利用するすべは心得ているであろう。必要な時にはそれは十分な精力と詭策と能力を發揮し、それを守るために、その諸要求に合法的形式をまとわせる文筆家、学者、弁士を見出すであろう。既にわが国の大部分の学者とジャーナリストはブルジョアジーの利益のために働いている。彼等と共に弁護士、文士、そしてとりわけ資本家たち——大小の肉食鳥類——は、アレクサンドル二世かアレクサンドル三世が、又はどんな革命政府にせよそれが、憲法の外観で彼等になげ与える「菓子」に貪慾にとびかかるであろう。この貪慾な鯨たちがこの菓子をむさぼり楽しんでいる間、あなた方は離れており、あなた方の怒りも無力であろう。人民に関しては、到る処でそして常にそうであったように、憲法の擁護に加わりはしないであろう。あなた方は選挙戦を、農民を代表する議員たちを、頼りにしているのか。それは無駄である。そしてその理由は、クーデターが上からなされる時、人民は不意打をくわされるであろうからである。

しかしわれわれは、政治的自由の反対者たるにはあまりに人間の人格を尊敬している。西方におけると同様わが国でもまた、政治的自由に対する渴望はわれわれの発達の結果であり、われわれの社会意識の産物であり、よく限定され、明白に表明され意識されている一つの概念である。人民にとっては政治的自由は、一般に具体的な、目にみえる事実と常に結びついた自由への本能的な渴望である（土地の平等な用益権、どの労働者も公共の問題の討議に参加できる権利、など）。それ故に、政治的自由の理念は人民にとって理解し得ざるあるものであるとの言は、全く道理に合わない。それは知識人にとつてと同様人民にとつても必要である。違いは、この必要が、人民にとっては、より緊急の、より重要な、経済的性質の他の必要と結びついていることである。それ故に、政治的自由が完全に確立されて敵対的分子による収奪と変形化に対して守られることを望む革命的社会主義政党はどれも、この必要を、人民の理解する如き経済関係の地盤の上で闘いの党を人民の中に組織する以外には到達され得ないものであるこの必要を、考慮すべきである。……

人民の間でのわれわれの役割は基本的には端緒をつくることである。残りはすべて人民自身、その最もよい代表者たちによって行わるべきである。人民はずつと以前から既にこのタイプを創り出している。私がいうのは、どの瞬間にも人が人民の中に見出し得る反抗分子——それがニキタ・セメコフ<sup>1)</sup>の如き分離教徒にせよ、あるいはブリャヂコ<sup>2)</sup>の如き器用でずるい煽動者にせよ——のことである。普通人民大衆は全く一様、一色であると考えられ、二三の事実によって敢て一般化が行われている。人民の中に生きて来たものは、人民は如何なる多様性を、ただ一つの共同体の中でも、習慣、意見、智的発達程度、積極的抗議能力において示すか、を知っている。大衆のこの多様性が、われわれの考えでは、革命的活動にも最も好都合な条件である。……

1) 1682年摂政ソフィアの時にニコンの改革の廃止を策して失敗し絞首刑に処せられた分離教徒の指導者ニキタ・プストスヴァト Никита Пустосвят のことかと思われる。

2) ブリャヂコ (O. Прядько) はナロードニキ運動史上有名なチギリン Чигирин 事件 (1877) で重要な役割を果たした農民で、シベリアに流された。

## 資料 X

### 一社会主義者の政治的書翰<sup>1)</sup>

#### 第一の書翰

.....

あなた方は、近代史を研究して、大革命がヨーロッパを自由、平等、博愛の約束の地に導かなかつたこと、立憲体制が、権力をブルジョアに委ねて、形式的な政治的自由にかくれて人民に対する経済的権力をブルジョアに許与していること、を理解した。ヨーロッパ史のこの傷ましい結果は、あなた方の間に政治的自由の原則に対する不信を植えつけた。ロシアのすべての病いを次々に病んで、それからこの自由な共和主義的土壌の上で、政治的及び経済的闘争の行程を如実に観察しているロシア人たる私は、あなた方の不信の真価を知っている。然り、あなた方は正しい。立憲体制は労働の資本との争いを解決せず、他人の労働の横領という、昔からの不正を取除くことなく、反対にその一層の発展を容易にしている。しかしあなた方は、政治的闘争を拒否する時、非常に誤っている。あなた方は、自己の理念に一意没頭している生きた人間から、乾いた理論家へ、実際の経験全体と矛盾する理論的結論を頑固に暗記した書齋人へ変る。

あなた方は将来における立憲体制を、それはブルジョアの嫌悪すべきくびきを伴うであろうという理由で、恐れている。自分の周囲を見廻しなさい。このくびきは、神の御加護による敬虔な、独裁的な皇帝の統治という形で、既にロシアに現れている。ロシアの紋章のわしには二つの頭、二つの貪慾なくちばしがある。その一つは、辺境を拡大して服従させておくためと、専制的権力の礼節を保持するため、王朝的=軍事的=警察的諸目的をもって、ロシア人民の肉体を引裂いている。あなた方は、もし政治闘争を拒否するならば、この容赦のない、法外な「鉄のくちばし」にくむことが十分でなく、それによって苦しめられているロシア人民を愛することが十分でない。実際と現在とがひどいものである時に、あなた方は理論と未来に生きている。しかしあなた方は理論においても誤っている。紋章のわしの強慾な二つのくちばし、これは貪慾な胃の単一なことによって結ばれているから。

アレクサンドル二世は憲法を与えないであろう。それは彼から奪いとることだけができる。彼は、ゼムストヴォや文献や裁判におけるほんのちょっとした反対の現れからも嫉妬深く専制的権力の礼節を護りながら、盲人の頑固さをもって独裁的君主として死ぬことを欲している。しかしこれは彼の個人的な事柄である。国家的な意義においては独裁は、ルーシにおいては、軍事=警察的現実を除けば、既に、ずっと以前から農民の柔和な心のどこかにだけ生きている輝かしい神話にすぎない。ロシアは、貪慾な私人の手による底なしの私人の物入れの結込み作業がはげしく行われているのをかくしている、てんの皮の皇帝の緋袍でおおわれているにすぎない。かつては華麗であったが今ではしみに喰われたこの緋袍をはぎとってみれば、あなた方は完全に準備された、活動的なブルジョアを発見するであろう。彼等は自主的な政治形態をとっておらず、ツァーリの緋袍のひだにかくれているが、これはただ、人民の財産の奪取と人民の労働の横領という自己の歴史的使命を遂行するのにこの方が便利だからである。大公コンスタンティンには、自分の副業たる盗賊業を

1) Лит., стр. 87—92 (第一の書翰), стр. 170—175 (第二の書翰)

そのかげにかくれてうまくやるために、独裁的ツァーリが必要である。大臣ヴァルエフには、国有財産をその手の下から奪取するために、独裁的ツァーリが必要である<sup>1)</sup>。村のクラークには、貧民たちを農奴化するために、独裁的ツァーリの放射物たる独裁的な郡警察署長が必要である。工場主には、秘かに協約した労働者を何度もかりとるために、同様の放射物たる独裁的な市警察署長が必要である。ヨーロッパのブルジョアジーにとっては独裁は邪魔であり、わがブルジョアジーにとってはそれは支柱である。ヨーロッパでは政治的自由は、既に鞏固な、組織された、精神的・物質的に強力な第三身分が構成された後に、宣言された。ヨーロッパのこの不幸の中にわれわれに対する教訓がある。わが国では政治的自由は、ブルジョアジーが独裁的ツァーリとその放射物を必要としないまでに団結し、鞏固になる以前に、宣言されなければならない。このような瞬間は近すきつつある。ツァーリの緋袍の保護下に成長しつつあるブルジョアジーは緋袍をばらばらに寸断するであらう。そしてあなた方はその時歴史の毅然たる法廷の前で何を云うのか。政治闘争をさせたことによって、あなた方はブルジョアジーの発達を滞らせたか。いや、あなた方はそれを助けたのだ。警察署長が独裁的であればあるほど、クラークには強奪がしやすいのだから。

政治闘争に対する偏見はロシアでは強い。最も立派な人達もこの偏見に感染している。彼等の中には平和的進歩の人々も革命の人々もいる。平和的進歩の人々は、農民が自己のみこむことをブルジョアジーに許されないほど十分に精神的・物質的に一人前になる時始めて、独裁はその使命を終了させるであらう、と考えている。これは、もし独裁が私的掠奪に活動を許すことなく、又自らも人民の血や肉を喰うことがないのなら、理由のある判断であらう。人民の知的及び物質的発達についての独裁の配慮はどこにあるのか。独裁がその鉄のくちばしで農民を骨までつばばんでいる時、独裁への期待は何の上に支持されるのか。

革命の人々は人民叛乱に期待をかけている。これは信念の問題である。私はこの信念をもっていない。しかし、信じている人たちの立場に立って、私はおたずねする。何時人民叛乱は起りそうなのか。伝説によれば無知な人民がなお信仰している、遠い、半ば神話的なツァーリが政治体制の頂点に座している時か、それとも、選挙された人々、平凡な人たちが、一切の神秘的な後光なしに、国を統治している時か。

ヨーロッパの社会的病疾の責任は政治的自由にはなく、私的掠奪制度にある。この制度は一定時期まで、政治的自由を必要としないばかりでなく、反対に、独裁の位階制的放射物の中に自己にとってよりよい支持を見出す。ロシアはこのような状態にある。現在に生き、生きた敵と戦いなさい。この敵はあなた方を容赦しはしない。それなのに何のためにあなた方はいつもこの敵を容赦しようとするのか。

あなた方は獄舎や流刑地を恐れない。あなた方は自らの思想を恐れている。……<sup>2)</sup>

1) 大公コンスタンティン константин (1827—92) はニコライ一世の二男、兄アレクサンドル二世の治下で政界に大きな勢力を有した。ヴァルエフ П. А. Валуев (1814—90) は 1861 年から 68 年まで内相の地位にあり、72 年国有財産相となり、77 年から 81 年まで内閣議長を勤めた。なおグロニヤル (シハイロフスキー) のこの「第一の書翰」が発表された「人民の意志」2 号には、この書翰のすぐあとに、「誰の側に徳性はあるか На чей стороне нравственность?」という、コンスタンティン大公始め当時の皇族や政府高官の汚職と不道徳を批判した論文が収められている (Лит., стр. 93—100)

2) この <……> は原文のもの。

しかし私は、「恐れていた」と過去形を恐らく使うべきであったのを言い違えてしまった。私は、「人民の意志」を受取って、あなた方にルソーの祖国からルソーの名前で熱烈な挨拶を送るために、ただちにペンをとった。しかしあなた方がおくれて本当の途に就いたことと私のすべての観察とは、「一社会主義者の政治的書翰」が不用ではないことを私に確信させる。政治闘争に反対する偏見は、専制が一切の誠実な活動をそこから追放している現在の実際の体験ではなくて、将来、理論及び幻想に生きるようにわれわれを習慣させたロシア史全体によって育て上げられている。繰り返すが、ロシアの地の塩である最も立派な人々もこの病気に感染している。あなた方が健康になって、政治的縁者びいきは人民の敵のみを利することを理解すべき時が来ている、ずっと前からその時が来ている。立憲体制はロシアにおいて明日の問題である。この明日は社会問題の解決をもたらさないであろう。しかし果してあなた方は明日は手をくまねいていたいのか。果してあなた方は闇に倦きたのか。私を信ぜよ、もっとも心のあった人民叛乱さえ、それが可能であるとしても、あなた方に高枕でやすむことを許さず、新たな緊張、新たな闘争を要求するであろう。いつも生き、いつも闘え。「平和と、人には善意<sup>1)</sup>」は、遠い将来のことである。われわれとあなた方はそれまで生きのびないであろう。将来の闘争のすべての有為転変を予見することはできない。……

グロニヤル<sup>2)</sup>

ジュネーヴ、1879年11月2日(10月21日)<sup>3)</sup>

## 第二の書翰

……私は政治的殺害に関するロシアの革命家たちとの私の会話、ヨーロッパの革命家＝社会主義者ならその基礎を理解することすらできない会話をまざまざとおぼえている。私は冷静に人を殺すことはできないし、誰を如何に殺すべきかを他人に教える権利があると考えたことはどんな場合にもない。しかし、個人的な特質からは離れて事態を専ら論理的な側面からみて、私はメゼンツェフ<sup>4)</sup>、ゲイキング<sup>5)</sup>などの殺害が如何なる実際上の意義を有しているかを知らうと努めた。私が得た様々な提案や説明の中にはこのようなものがあった。私に云われたところでは、ロシア革命は専ら社会的性格を有しており、われわれは憲法を欲しておらず、憲法は人民の上に新たな重荷を置くだけであって、それ故われわれは政治闘争を避ける。他方殺害はどこまでも自己防禦の性格を有する。即ちスパイがわれわれの邪魔をしている、だからわれわれは彼等を除く。メゼンツェフ流の連中がわれわれを圧迫している、だからわれわれは血には血を以て報いる、というのであった。私は反駁した。即ち、あなた方は全く言葉でおびえており、自分の思想を恐れている。あなた方の自己防禦は政治闘争でなくて何なのか。あなた方は政治闘争を欲せず、諸事情があなた方

1) ルカ伝、II、14を参照。

2) (原註)私は時期が来るまで私の名前を公表しないことをあなた方に願います。私は仮名で署名しているが、この仮名は若干の個人的な想出の故に私には大切なものであり、そして、恐らく、私の手紙のぐちゃばい調子にふさわしいものである。

3) かつこの中が露曆

4) メゼンツェフ Мезенцев は皇帝直屬官房第三部(政治警察担当)の長官で、1878年8月4日の白昼ペテルブルクでテロリストのクラフチンスキー(ステプニャク) Кравчинский に射殺された。

5) ゲイキング Гейкинг は1878年5月25日キエフでテロリストに暗殺された憲兵将校。

にそれを強いている。しかしいつもそして到る処でそうだったのだ。この点ではあなた方は歴史に前例のない何ものかをなしているのではない。いつもそして到る処で人々は、処与の政治組織が彼等の自由な活動を圧迫したが故に、政治闘争の舞台に進出したのである。あなた方の場合にも、公然たる闘争のための自由な広場を全く持たないので秘密的政治的殺害に走らされているという違いはあるが、全く同じことが起っている。しかしこの殺害も歴史上新しいものではなく、その中になんら特に社会主義的なものはない。これは全く、貴族も、僧侶も、自由主義者も、無雑作に陰謀家もたよるところの政治闘争の特殊な型である。……あなた方の殺害はその中に何ら社会主義的なものを含んでいない。これは純粹に政治的な闘争の行為である。あなた方は否応なしに生の要求に服従しているが、それでも自説を固執し、自分自身からかくれ、自分自身の思想を論理的帰結まで導かず、それを体系に変えていない。そして完全な一体系があなた方に対立して立っている。ゲイキングやクロポトキン<sup>1)</sup>の如きつまらぬものではなく、ロシアの全政治体制が全体として又すべての細部にわたってあなた方の活動をさまたげている。この政治体制はロシアにおいて、あなた方が自己の唯一の敵と考えているブルジョアジー以外のすべてのものを、恐ろしい鉄の大槌のように圧迫している。このブルジョアジーの頭からは、ロシアの独裁の側からの血の仕返しなしには、一本の毛も落ちないであろう、ことは確実である。ツァーリの意志で、国家はあなた方の敵の擁護に、「鋼鉄の剛毛を輝かして」、立上るであろう。そしてその場合ゲイキング、クロポトキンは、モスクワのどんな肉屋でも、何時たりとも、彼等を変えることができる時に、何を意味するであろうか。そうではない、ゲイキングやクロポトキンが殺さるべきではなくて、独裁の理念が殺さるべきなのだ<sup>2)</sup>。この理念は、辛抱強く無知で、いまだに何かをツァーリから期待している人民の生活から、又心から根絶さるべきである。人民！果して人民の名においてメゼンツェフ、ゲイキングは殺されたのか。そうではない、これはあなた方の個人的な事柄、短剣と連発拳銃のたすけをかりた個人的な論争である。人民にとってはこの卑むべき人々は半ば神話的なツァーリの忠実な僕にすぎず、彼等からは人民は直接にはかって悪意を感じたことはないのである。人民にわかる農業問題という言葉で、彼が人民の敵であることを、愚者の勇敢さをもって宣言したマコフ<sup>3)</sup>は話が別である。火打石から火を打出すように百姓の体から未納金を打出す警察分署長と、あらゆる身近かな具体的な圧制者と侮辱者は話が別である。しかしそのような殺害については聞いていない。あなた方は、政治闘争を欲しないので、人民の中にも、他の如何なる社会層の中にも支持を求めないでいる。あなた方は「自己防禦」で、即ち政治闘争には違くないが断片的、非組織的、非意識的なそれで満足している。……<sup>4)</sup>

ほぼこのように私はわが国の革命家たちとずっと以前に語った（ここでは私はマコフの例をつけ加えただけである）。この議論が時既におそかったか、それともなお何かに役立つかを判断することはしまい。繰り返すが、私は殺人者ではなく、殺人の教唆者でもない。私自身には政治闘争は全く違った形で表象される。私はただ、短剣や連発拳銃に手を

1) 1879年2月9日に暗殺されたハリョフの総督クロポトキン Д. Н. Кропоткин 公。

2) (「人民の意志」編集部の註) われわれは政治的殺害についての筆者の見解を完全には理解しない。いずれにせよ、彼の見解について責任はとらない。

3) 1879年7月16日内務大臣マコフ Маков は回章を出して、当時流布していた政府による新土地分配の噂を農民が信ずることのないよう警告を発した。

4) この〈……〉は原文のもの。

出す人々の立場を論理的に発展させ、彼等が政治的自由に関する偏見のために自己の思想を帰結まで導くことができないのを見るだけである。悪くすると、どれかの社会分子に、あるいはすべての不平分子にさえ、依存する組織的な政治闘争は、政治的変革を、「憲法」をもたらすであろう。これが、ロシアの革命家の恐れようとする「恐ろしいもの」である。

……………

自由主義者たちとの同盟も亦、もしあなた方が誠実にこの同盟に入り、偽善なしに彼等に自己の神聖な標語「土地と自由」を明言するならば、恐るべきものではない。彼等があなた方に加わるのであって、あなた方が彼等に加わるのではないであろう。実際の闘争においては、たとえ偶然的で一時的なものであっても、同盟の利益を利用しないのは利口ではない。そして正直に言えば、私は、多くの自由主義者はあなた方の感じているよりははるかにあなた方に近い、と考えている。ロシア生活の諸条件の特殊性を明かに理解するならば、彼等は更に近くなるであろう。……………

グロニヤル

ジュネーヴ、1879年12月9日(11月27日)

## 資料 XI

### 執行委員会のアレクサンドル三世宛の書翰<sup>1)</sup>

陛下。

現在陛下が感じておられる痛ましい気分を十分理解しながらも、執行委員会はしかし、以下の説明のためにはしばらく待つことを恐らく要求する自然の思いやりの感情に屈することを許されているとは考えません。人間の最も正当な感情よりも更に高い或るものがあります。それは祖国に対する義務であって、この義務に対しては市民は自己を、自己の感情を、更に他の人々の感情すらを犠牲にすることを強いられています。この絶対の義務に服してわれわれは即刻、何ものをも待つことなしに陛下に訴える決意をしています。流血と最も恐るべき変動を以て将来のわれわれを脅かしている歴史の歩みは、待つてはくれないからであります。

エカテリナ運河で演ぜられた流血の非劇<sup>2)</sup>は偶発事ではなく、又何人にも予期されないことでもありませんでした。過去十年間に起った一切のこの後には、これは全く不可避であり、そしてこの点に、運命によって政府権力の頂点に置かれた人の理解すべきことの深い意味があります。こうした事実を個々の人物の、あるいは「徒党」さえもの、奸計によって説明することができるのは、人民の生活を分析する能力の全くない人だけです。過去十年間われわれが見ているように、わが国では、最も苛酷な迫害にもかかわらず、先帝の政府がすべてを——すべての階級の自由、利益、産業の利益、そして自らの威厳すらを——革命運動の弾圧のために犠牲にしたにもかかわらず、しかもなお革命運動は国の最良分子、ロシアの最も精力的で献身的な人々をひきつけて強く成長し、そして既に三年来政府と必死のパルチザン戦を展開しています。陛下、先帝陛下の政府が活動力の不足という

1) Лит., стр. 903—08

2) アレクサンドル二世暗殺事件のこと。

ことでは決して非難さるべきでなかったことを陛下は御存知です。わが国では正しいものと罪あるものが絞首刑にされ、監獄と遠い県が流刑者であふれました。いわゆる「首謀者」が何十人も捕えられて絞首刑に処せられ、彼等は殉教者の勇気とおちつきを以て死にました。しかし運動は絶えることなく、とどまることなく成長し強くなりました。そうです、陛下、革命運動は個々の人物に左右されるようなものではありません。それは人民的有機体の過程であり、この過程の最も精力的な表現者たちのために建てられた絞首台も、救生主の十字架上の死が墮落した古代世界を改革的キリスト教の勝利から救いえなかったように、老廃した秩序を救うには無力なのであります。

勿論政府は更に個々の人物を多数逮捕し、絞首刑にすることができます。政府は個々の革命グループを多数破壊することができます。政府が現存の革命組織のうち最も有力なものまで破壊すると仮定しましょう。しかしこうしてことすべても決して事態を変えません。革命家を創っているのは環境、人民の一般的な不満、新たな社会形態に対するロシアの志向であります。全人民を消滅させることはできません。弾圧によって人民の不満をなくすることもできません。不満はこのことから反対に増大します。この故に、撲滅されたものの代りに、ますます多数の、更に一層怒りっぽく、更に一層精力的な新たな人物が絶えず人民の間から出て来ます。いうまでもなくこれらの人物は、その先人たちの既成の経験を有していて、闘争に有利に、組織されています。ですから革命組織は時と共に量的にも質的にも強化されるはずで、これは過去十年間われわれが実際に見ているところです。ドルグーシン派<sup>1)</sup>、チャイコフスキー派<sup>2)</sup>、74年の活動家たち<sup>3)</sup>の滅亡はいかなる利益をもたらしたのでしょうか。彼等の代りにはるかにより果敢なナロードニキが現れました。政府の恐るべき弾圧は次いで78—79年のテロリストを登場させました。政府はコヴァリスキー<sup>4)</sup>、ドゥプロヴィン<sup>5)</sup>、オシンスキー<sup>6)</sup>、リゾグープ<sup>7)</sup>といった連中を撲滅したが、無駄でした。政府は数十の革命的サークルを破壊したが、無駄でした。これらの不完全な組織から、自然淘汰によって、より強い形態が出来上っているだけです。最後に、政府が現在まで処理し得ないでいる執行委員会が現れます。

われわれが生活して来た十年間を公平に眺める時、政府の政策が変りさえしなければ、運動の今後の歩みを誤りなく予言できます。運動は必ずや成長し、拡大し、テロ的性格の事実はますます尖鋭にくりかえされます。革命組織は、撲滅されたグループの代りに、ますます完全・鞏固な形態を進出させるのでありましょう。この間に不満なものの総数は国内

- 1) ドルグーシン (Долгушин, А. В., 1848—84) を中心に 1872 年ペテルブルクに生れ、翌年モスクワにその中心を移したバクレーニン主義の革命サークル。「人民の中へ」の運動はこのサークルによって開始された。
- 2) チャイコフスキー (Чайковский, Н. В., 1850—1926) 等によって 1869 年ペテルブルクで組織され、他の都市にもサークルをもった大きなナロードニキの組織。ラヴロフ主義者が勢力を占め、人民に対する啓蒙宣伝を重んじた。
- 3) ドルグーシン派に続いた「人民の中へ」の運動の参加者たち。
- 4) コヴァリスキー (Ковальский, И. М., 1850—78) は 70 年代に南ロシアで革命運動をした人物。1878 年逮捕されて、軍事裁判で死刑に処せられた。
- 5) ドゥプロヴィン Дубровин は陸軍少尉。家宅搜索の際武器をもって反抗したためペトロパヴロフスキー監獄に投ぜられ、1879 年 4 月 20 日軍事裁判で死刑に処せられた。
- 6) オシンスキーについては 31 ページの註 1 を参照。
- 7) リゾグープ (Лизогуб, Д. А., 1850—79) は「土地と自由」党に属して、革命運動に資産を献じた地主。オシンスキーの同志。1878 年逮捕され、翌年死刑になった。

で増大します。政府に対する信頼は人民の間で間違いなくますます低下し、革命とその可能性及び不可避性についての思想はますます強くロシアで発達しています。全ロシアの恐るべき爆発、流血の置きかえ、発作的な革命的激動が、この旧秩序破壊の過程を完結させるであります。

この恐ろしい見込みを呼起し、ひき起すのは何でありましょうか。そうです、陛下、恐ろしい、悲しむべき、です。これを単に文句とおとりになってはいけません。これほど多くの才能、これほどのエネルギーが、違った条件の下でならこれらの力は直接建設的な仕事に、人民とその精神、福祉、その市民的共同生活の発達に、支出され得るであろう時に、破壊的な仕事に、流血のなぐりあいにおいて失われることが如何に悲しむべきことかは、他の誰よりもわれわれがよく理解しています。では流血の闘争のこの悲しむべき必然性はどこから起るのでしょうか。

陛下、それは、現在わが国には本当の意味における真の政府が存在していない、ことからなのです。政府はその本質からいって、専ら人民の志向を表現し、専ら人民の意志を実現すべきであります。しかるにわが国では——この表現をお許し下さい——政府は全く宮中の徒党に退化し、執行委員会よりもはるかに掠奪的徒党の名にふさわしいのです。

君主の意志は如何なるものであるにせよ、政府の行動は人民の利益及び志向と何ら共通のものをもっておりません。皇帝の政府は人民を農奴制に従属させ、大衆を貴族の権力に委ねました。現在政府は公然と、投機業者と仲介業者という最も有害な階級を創っています。政府のすべての改革はただ、人民がますますひどい奴隷状態におち入り、ますます多く搾取される、という事態を招来しています。政府はロシアを導いて、人民大衆が現在では完全な極貧と無一物の状態にあり、自分の家のかまどのかたわらにあって最も侮辱的な監視から自由ではなく、自分たちのミールの、共同体の、事項においてすら権能をもっていない、というまでにしてしまいました。法と政府の保護を利用しているのは掠奪者、搾取者だけであり、最もけしからぬ強奪が罪せられないでいます。しかしその代りに、何と恐ろしい運命が、心から公益を考えている人を待っていることでありましょう。陛下、流されたり、追われたりしているのが社会主義者だけではないことは、陛下がよく御存知です。では、このような「秩序」を維持している政府とは何でありましょうか。それは徒党ではないのでしょうか。完全なさん奪の現れではないのでしょうか。

これこそロシア政府が人民の間になんらの倫理的影響力、なんらの支持を有していない理由であります。これこそロシアがこれほど革命家を生んでいる理由であり、皇帝暗殺の如き事件さえが住民の大部分の間で喜びと共感を呼び起している理由であります。そうです。陛下、おべっか使いや召使いたちの評判で自分をあざむいてはなりません。皇帝暗殺は、ロシアでは、非常に評判がよいのです。

このような状態から二つの結論が可能です。どんな死刑によっても予防できない、全く不可避的な革命か、最高権力の人民に対する自発的な呼びかけかであります。祖国のために、力の無益な破滅をさけるため、常に革命に伴う恐るべき災厄をさけるため、執行委員会は陛下に第二の途をえらばれることを忠告します。最高権力が恣意的であることをやめるや否や、それが人民の意識と良心の要求だけを実現することを堅く決心するや否や、陛下は、政府の名誉をきづつけているスパイを大胆に追出し、警備兵を兵營に遠ざけ、人民

を墮落させている絞首台を焼くことができることを信じて下さい。執行委員会は自らその活動を停止し、そのまわりに組織されている力は散って、同胞の福祉のための文化的な仕事に自らを捧げるでありましょう。われわれの方が陛下の僕たちよりも嫌っており、そしてわれわれが悲しむべき必要だけから使用している暴力に、平和な、思想のたたかいが代ります。

われわれは一切の偏見をすて、永年の政府の活動が削った不信をおさえて、陛下に訴えます。われわれは陛下が、人民にあれほどの悪をなし、人民をあれほどあざむいた権力の代表者であることを忘れます。市民にして誠実な人間としての陛下に訴えます。個人的な憤怒の感情が陛下の中で、その責任感と真実を知る希望を消すことのないように希望します。憤怒はわれわれにもあり得ます。陛下は父上を失われました。われわれは父ばかりでなく、更に兄弟を、妻を、子供を、良き友を失いました。しかしわれわれは、ロシアの福祉がそれを要求するならば、個人的な感情をなくする用意があります。同じことを陛下からも期待します。

われわれは陛下に条件をつけはいたしません。われわれの提案をして、陛下にショックを与えさせてはなりません。平和な工作が革命運動にとって代るのに必要な諸条件はわれわれによってではなく、歴史によって創られます。われわれは条件をつけるのではなく、それに注意を促すだけなのです。

その条件というのは、われわれの意見では、二つあります。

1) これまでのすべての政治犯罪に対する大赦。これは犯罪ではなくて市民的義務の遂行だったのだからです。

2) 国家及び社会生活の現存諸形態を点検し、それらを人民の希望に応じてつくりかえるため、ロシア人民全体から代表を招集すること。

しかしながらわれわれは、人民代表による最高権力の公認は選挙が完全に自由に行われる時にだけ達成され得る、ということに注意を促すことを必要と考えます。この故に、選挙は次のような事態の下で行われるべきであります。

1) 代議士はすべての階級及び身分から無差別に、そして人口数に応じて送られる。

2) 選挙人にも代議士にも如何なる制限も存在すべきではない。

3) 選挙戦と選挙そのものは完全に自由に行われるべきであり、それ故に政府は、人民議会の決定の時まで、臨時の措置として、

a) 完全な出版の自由

b) 完全な言論の自由

b) 完全な集会の自由

r) 完全な選挙綱領の自由

を許すべきである。

これが、ロシアを正常な、そして平和な発達の途にもどす唯一の方法であります。われわれの党としては、上述の条件を守って選ばれた人民議会の決定には無条件に服し、人民議会の承認した政府に対してはいかなる暴力的反対行動も今後はあえてすることのないことを、われわれは祖国と全世界の面前でおごそかに宣言します。

かくて、陛下よ、御決定下さい。陛下の前には二つの途があります。選択は陛下にまかされています。われわれとしては、陛下の理性と良心が、ロシアの福祉と陛下自身の尊厳

及び祖国に対する義務にふさわしい唯一の決定を、陛下に命ずるよう、運命に請い願うことしかできません。

執行委員会

1881年3月10日

## 解 説

「人民の意志」党の革命理論は、ナロードニキの運動のテロリズムの段階におけるものであり、従って政治的テロ方式の理論的基礎づけという側面をもっている。しかしこの基礎づけは、政治的テロ＝暗殺そのものの弁護という消極的な形では現れておらず、より積極的に、政治的テロを有力な手段とする政治革命の経済革命に対する優先の主張という形で展開されている。西ヨーロッパのブルジョア革命の経験に学んだゲルツェン以来のロシアの革命家たちが伝統的に有していた政治的自由に対する不信、経済＝社会革命を政治革命に優先させなければならぬという「偏見」——これとの闘いが「人民の意志」党の理論家たちの主な仕事であった。そして又この点に「人民の意志」党の革命理論の最大の意義があった。しかし正にこの点で「人民の意志」党の革命理論は、これまでのナロードニキの革命理論からある程度逸脱した、多分に非ナロードニキ的な側面をも有していた。

しかしながらこれは決して偶然ではない。「人民の意志」党による政治革命優先の主張の背後にはナロードニキ的な革命方式であった73—74年の「人民の中へ」の運動の失敗の経験に由来する、「潜在的な革命家」としての人民＝農民に対する幻滅が大きく尾を引いているからである。即ち「人民の意志」党の政治革命優先の主張と政治的テロの革命方式は、ナロード（人民）の革命的イニシアティブをも早信頼できなくなったナロードニキの主張であり、実践であった、ということが出来る<sup>1)</sup>。軍＝革命組織綱領（資料 VIII）で党

1) これを端的に示す資料として「人民の意志」党4号所載の「ナロードニキ・グループの宣言 Заявление группы народников」（Лит., стр. 293—94）をつけ加えておく。（この場合「ナロードニキ」とは「人民の中へ」の運動に直接参加した狭義のナロードニキのことである）

「われわれが最初に意識的＝革命的な大衆組織を創ることを自らの目的とし、この組織の力とイニシアティブによって人民叛乱が起されるであろう、としたところの、人民の間での数年の活動の後、われわれは次のような結論に到達した。

1) このような大衆組織は現在は多くの理由から達成し得ない。

2) 人民の間に総体的革命運動を起すためには、政治的変革の如き、又は経済的及び一切の偶然的原因（全ロシア的飢饉、敗戦など）の一定の結合の如き、強力な外的刺戟が必要である。

3) .....

昨年二つの分派への党の分裂を人民解放の事業に極めて有害と認めつつも、われわれは同時に次のことを認める。

1) 「人民の意志」党の革命的事業の立て方は正しく、そして革命的活動のすべての分野を包含している。

2) 農村大衆の間での事業遂行の方法においてわれわれは「人民の意志」党と完全に一致し、そして

3) テロの事実は、現在の政治的諸条件の結果不可避であって、識者を鼓舞し、人民的意識のせん明を助ける。叛乱の時期に組織的に行われるテロの事実は叛乱の成功を最高度に助ける。

これらすべてにかんがみ、又同じく活動の相互の調和のために、われわれは「人民の意志」党への参加を決定したことを声明する。

聖ペテルブルク、1880年11月15日。

原文ではグループ員の署名がこれにつづいている。」

員と党活動の範囲が将校団に限られているのも、一般的にはナロードニキに共通のブチブルの革命思想に本来的なものというふうに考えられるが、具体的には兵士＝農民＝人民に対するこの党の根本的な立場に由来しているものといえよう。

それから又、「人民の意志」党の非ナロードニキ的側面を示す注目すべき点として、労働者と軍隊に対するかなり大きな期待があげられる。「人民の意志」党は「執行委員会綱領」の他に「労働者党员綱領」と「軍＝革命組織綱領」を有しているが、「農民綱領」又はそれに相当するものは有していない。又「人民の意志」党は特に労働者党员のために、「人民の意志」に次ぐ重要な機関誌として「労働者新聞」を出している。このことは革命＝叛乱を起すべき地点として大都市、特に首府（レニングラート、モスクワ）が考えられている事実と照応しており、そこに、わずか数年のへだたりしかないのに、「人民の中へ」の段階のナロードニキの革命方式及び思想とテロリズム段階の「人民の意志」党のそれとの間に大きな変化の生じたことがわかるのである。

しかし「人民の意志」党の革命思想のこのような特色を強調することと、その中にポリシェヴィイズムの思想的源流を見ることは別のことでなければならぬであろう。人民の革命的イニシアティヴに対する「人民の意志」党の不信は、人民の一切の潜在的能力、素質に対する不信では決してない。「人民の意志」党の理論家たちも、人民が潜在的にもっている政治的能力、あるいは潜在的な人民的原理の正しさに対する確信はもちつづけている。ツァーリの政府とそれに依拠しているブルジョアジーの政治的・経済的圧迫のため、この潜在的な能力の発揮される条件が現在は欠けているにすぎないのであって、「人民の意志」党が政治的テロを発端とし、軍隊と労働者の協力によって得られる首府における叛乱の成功によって、この抑圧者と寄生者を人民のために一たびはねのけてやりさえすれば、その後は、人民自身が、その潜在的な正しい人民的諸原理に従って、経済革命の課題をも含めて万事をうまく処理するであろう、という人民の潜在的な政治能力と人民的原理の正しさに対する樂觀的な信頼が、「人民の意志」党の革命理論には、一方において存在している。「人民の意志」党がこの名称（「人民の意志」）を以て自らの党名としているのも、彼等が人民の意志の体现者を以て任じているからではなくて、人民の意志の実現さるべき条件を創ることを以て自らの任務としているからである<sup>1)</sup>。そしてこの点では「人民の意志」党の人民観はナロードニキの伝統をそのまま受けついでいるものといわなければならない。

しかし、同様のことは、この党のロシア国家観についてもいうことができる。「人民の意志」党のロシア国家観は、あらゆる階級から超越した実体としてのロシア国家という観念を中心とするものである。ヨーロッパの国家についてはそれがブルジョア国家であることを認めつつも、ロシア国家については一切の階級的基礎が否定されていて、この点ではナロードニキの伝統的なロシア国家観から一步も出るものではない。しかし農奴解放後二十年近くを経たロシアにおいてブルジョアジーの成立とその大きな力は、「人民の意志」党にとっても早否定することのできない事実であった。「人民の意志」党の革命理論の中にわれわれは容易に、ブルジョアジーの急速な進出に対する恐れと憎しみを読みとることができる。「人民の意志」党の理論家たちは、ロシアのブルジョアジーがロシア国家の産物であることを執拗に強調しながらも、このブルジョアジーは現在のままで成長を許さ

1) 47 ページの註2 参照。

れるならば、急速に成長して自分を産んでくれたロシア国家に支配者としてとって代り、その後にはロシア人民の解放の事業は現在よりもはるかに困難になるとし、このことを理由にブルジョアジーがなおロシア国家に依存している間にこの国家を倒さなければならない、と主張している。そしてこれが、何よりも先づ現在の独裁的なツァーリ政府の国家権力を倒さなければならないという、経済=社会革命に対する政治革命の優位の主張の大きな根拠になつているのであるが、そこには、同時に、明かに、ブルジョアジーの予想外に急激な成長に対する恐怖から来る一種のあせりが認められる。このあせりが「人民の意志」党のテロリズムと無関係でないことはいうまでもない。

しかし現在の国家権力を倒した後の革命の建設過程への展望においては、「人民の意志」党の理論家たちは甚だ楽天的である。この楽天的な展望は、一方では、上に述べた人民的原理と人民の潜在的な政治能力に対するほとんど全面的な信頼にもとずいており、他方では議会制度に対する、これは又楽天的な信頼にもとずいている。「人民の意志」党の理論家たちは、憲法制定議会の成立までの時期については、議会の民主的な構成とその自由な選挙に関して神経質と思われるほど配慮を示しているが、それ以後の見透しについてはあまり熱意を示しておらず、万事を制憲議会の決定にゆだねて安心しきっている、かのように思われる。農業・工業の諸分野における共同体（ミール・アルテリ）を基礎にした地方自治と連邦制が将来のロシア国家のあるべき姿と考えられているが、このナロードニキの正統的な理想国家像も、「人民の意志」党の理論家たちにとっては、潜在的な人民的原理が既にその実現を保証しているものであって、制憲議会成立後における党の格別の活動をその実現のために必要とするものではない。

この人民的原理と人民の政治的能力に対する信頼の上に立って、「人民の意志」党の理論家たちは、党の任務を原則的には破壊の仕事に限っており、ある場合には、新しい社会の建設過程において党が人民に対する指導性を発揮することを、むしろ慎むべきこととさえ考えている。この点で「人民の意志」党はジャコバン的傾向のトカチーフなどとは考え方を異にしている。新しは社会の設計と建設をも古い国家権力に代った革命権力の仕事と見なしたトカチーフとは違って、「人民の意志」党はこれを制憲議会の仕事とみなしているからである。即ち制憲議会の成立と共に党の任務は終るのである。

ところでしかし、新しい社会の建設がこのようにして革命党によってではなく、人民によって、具体的には、民主的構成をもち、自由な選挙で選出される、人民の意志の正しい代弁者たる制憲議会によって実現されるべきであり、そしてこのような制憲議会の決定は全面的に信頼できるものであるとするならば、革命党にとって最大の目標はこのような議会を実現することであり、従ってこれがどのような経路によって実現されるかは、理論的には、二次的な意義しかもたないことになる。これは革命党の政治的テロに始まる叛乱の結果として実現されることもあれば、又、目下のところその可能性は少ないが、自然発生的な人民蜂起による革命の結果としても、あるいは更に、その可能性はますます少いにせよ、現在の政府の全面的な譲歩によっても、実性可能である。とにかくにも、自由な選挙による、民主的な構成をもった制憲議会が成立すればよいのである。——「人民の意志」党の革命理論の底には、明かに、こういった意味での議会主義がひそんでいた、ということが出来る\*。ところで、この議会主義こそは、アレクサンドル二世暗殺事件後の「人民の意志」党にみられる革命的ナロードニチェストヴォから自由主義ナロードニチェストヴ

への「退化」を理論面において媒介したものである、と考えられる。ミハイロスキーの「一社会主義者の書翰」(資料 X)と「執行委員会のアレクサンドル三世宛の書翰」(資料 XI)は、それぞれ違った意味においてはあがあるが、こうした点でも特に興味深いものである。しかしこの「退化」の局面との関連にまで問題をひろげることは、この解説の課題を越える恐れがあるので、ここではこの点についての問題の所在の示唆に止めておく。

\* この点で興味深いのは、「人民の意志」6号の巻頭にのった、米国大統領ガーフィールド J. A. Garfield 暗殺事件に関する、執行委員会の声明である。これは、時期的には「人民の意志」党が実践の面でも政治的テロ方式を反省し始めた時期のものであるが、テロリズムに対する党の原則的な立場と議会政治に対する信頼を物語っている。なお、この暗殺事件は 1881 年 6 月 20 日(西洋暦で 7 月 2 日)に起り、大統領は 9 月 7 日(19 日)に死亡している。

「執行委員会は、大統領ジェイムズ・アブラム・ガールフィールドの死去についてアメリカ国民に深い哀悼の意を表すると共に、ギトーの企図の如き暴力行為に対してロシアの革命家の名において自己の抗議を声明することを義務と考える。個人の自由が誠実な思想闘争に可能性を与えており、自由な人民の意志が法律ばかりでなく、統治者の人物をも決定しているような国においては、政治的殺害は、闘争の手段としては、ロシアにおいてわれわれがそれをなくすることを目的としている同じ専制主義の精神の現れである。個人の専制主義と党の専制主義はひとしくとがめられるべきであり、暴力は、それが暴力にむけられる時にだけ、是認される。

執行委員会、1881 年 9 月 10 日。

〔附記 本稿は当スラヴ研究室に交付された文部省の科学研究費によるものである。〕

# The Theory of Revolution of the Party "People's Will"

—Sources and Comments—

*Shigeto Toriyama*

Some important materials giving information upon the theory of revolution of the party "People's Will" in its early period (from its organization in 1879 to the assassination of Alexander II in 1881) have been classified here according to their contents, translated into Japanese and furnished with brief commentary.

The items are as follows:

## I. The Basic Principles of the Party.

1. "Социалисты и правительство" ("Народная Воля", т. 1),
2. "Задачи партии" ("Народная воля", т. 2),
3. "Желательная роль народных масс в революции" ("Народная воля", т. 4),
4. "Политическая революция и экономический вопрос" ("Народная воля", т. 5.).

## II. The Platform of the Party.

5. "Программа исполнительного комитета",
6. "Подготовительная работа партии",
7. "Программа рабочих членов партии Н. в.",
8. "Программа военно-революционной организации"

## III. Miscellanea.

9. "Open Letter to Former Comrades" ("Чёрный предел", т. 1),
10. Н. К. Михайловский, "Политические письма социалиста" ("Народная воля", тт. 2—3),
11. "Письмо исполнительного комитета к Александру III".

The above articles have been translated in whole or in part. The text has been taken from В. Bazilevskii, "Литература партии Народной воли" (Paris, 1905), except No. 9, which is the re-translation of a French version.